統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
19

日本における統計学の発展

第 19 巻

話し手　高橋正雄

聞き手　大屋祐雪
森博美
坂元慶行



1981年2月7日（土）

統計数理研究所にて

25089

25089

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（* 推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　実は、昭和6年に日本統計学会が創立されまして、その第1回目の名簿に先生のお名前があるわけですから、ちょうどことし、50周年になります。それで、この研究所の西平さんが代表者になり、統計学会の何人かのメンバーで、「日本における統計学の発達」というタイトルで文部省から科学研究費をもらうことになりました。この機会に、統計学会の先輩の諸先生方に、統計あるいは統計学とのかかわり、あるいは統計人とのご関係、そういうことを思い出の形ででも残していただき、それをつづると、1つのこれまでは書かれていない日本の統計学史というのができるのではないか、そういう意図でこの企画を始めたわけです。

先生は、経済学あるいは社会思想や社会主義、多方面にご活躍でございますが、きょうはそちらの方のことについては気にしないことにしまして、統計と統計学及び先生の統計学者としてのご関係等々、ご記憶をたどっていただいて、これからひとつ過去を語っていただきたいと思っております。

大内兵衛先生の『私の履歴書』(黄土社　1951年)という本の序文に、「高橋君が速記者をつれてあらわれて、大内の履歴を話せということでこの本ができた」と書いてございますが、あのときの先生ほど聞き方が上手じゃないのですが、ああいう形のものが統計学についてでき上がれば幸いだというふうに思っております。

それで、きょうお手元に準備しました年譜は、先生の『八方破れ・私の社会主義』(TBSブリタニカ　1980年)の終わりについているものでございまして、これをたど

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

りながら、それから森田優三先生の『統計遍歴私記』(日本評論社　1980年)というのがございます。ちょうど森田先生も高橋先生と同年代の方でございますので、こちらの方もひとつシナリオみたいな形でこれに重ねて先生のご意見をお伺いしていきたいと思っております。

先生は1901年、仙台にお生まれになって、それから小学校、東北学院をご卒業後、旧制の第二高等学校にお入りになり、それから東京帝国大学の経済学部に入学されていますが、「スタティスティクス」という言葉、あるいは「統計」という言葉に先生はいつごろ出会われたのか、ご記憶ございますか。

高橋　お答えする前に、被告(笑)としてぜひ申し上げておきたいことがあります。この企画、大変有意義なものだと思いますし、皆さんのご苦労に心から敬意を表しますが、私を被告に選んだことは大きなミスだったと思います。治安維持法下の日本では、私は統計学者という看板を掲げてはおりましたが、それは全くのカムフラージュだった。おまんまをいただくための方便、世を偽るための隠れみのだったのです。「統計以外のことなら何でもやる統計学者」とだれかがいっているんじゃないかと思っているんです。もちろん、私もまじめ人間(笑)ではありますから、統計にかかわるときはまじめにやったつもりですが、それにしても、というのが、こうして皆さんと対座しての感じです。そんな私をこうして「喚問」されたことについては感謝でいっぱいなんですが、それにしても……ですね。予審も裁判も始まらない前に情状酌量を懇願したかっこうになりました。しかし、公判廷ではありませんが、良心に従ってお答えいたします。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

その前に1つ、生理現象についてちょっと……、いま大屋さんがいわれたように、私は1901年生まれです。年内に80歳になります。それで老化、忘化、呆化が急スピードで進行中です。それに、雀百までで、相変わらず右飛左飛しているんです。しかし、私も望むところですから、どうぞ容赦なく訊問してください。

では、まともにお答えしていきます。

私は、大正11年に経済学部の学生になりました。1年生のとき統計学の講義がありました。それは高野岩三郎先生の、恐らく最後の講義ではないかと思うのです。それから、たしか竹下先生、文学部の社会学科ですか、その方の講義にも出ました。そのお2人の講義を聞いたわけです。高野先生のところで「スタティスティクス」という言葉を習ったのが初めてです。

西平　竹下先生とおっしゃるのは、竹下清松先生ですね。

高橋　そうです。統計のことは何も覚えていませんが、非常に温厚な紳士でした。

大屋　高野先生の伝記を見ますと、ちょうど大正12年の2月15日に最終講義がなされておりますが、先生はこの最終講義をお聞きになったわけですね。

高橋　そうですね。それですね。

大屋　高野先生の講義は最終講義だけで、竹下先生の講義はどういう講義でしたか。

高橋　竹下先生は、大学院に入ったときの私の指導教授でした。そのころは助手は大学院に入るということになっていたからかもしれませんね。こうして助手になり、竹下先生が指導教官ということになって、高野先生もいらっしゃらなくなっていたので、竹下先生の方へ引き渡

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

された。そして何度かお目にかかって、勉強しろといわれました。竹下先生、それから経済学部の保険の先生で森荘三郎、そのお2人に勧められて、いまは理科大学というのですか、牛込にありました物理学校に通いました。高等数学なるものを勉強しなければ一人前の統計学者ではないというので通ったのです。その辺で竹下先生とのかかわり合いということがあるわけですね。しかし、特別におじゃまして講義を聞いた、教えを受けたというようなことは余りなかったと思います。

それから、物理学校もおもしろかったですが、非合法ではないんですけれど、そのころ流行の「研究会」にも出ていたんです。夜遅く、疲労こんぱいして帰ると、母から「おまえは一体何になったんだ」といわれたくらいです。

大屋　先生の自叙伝の中にアモン（A. Ammon）教授のことが出てまいりますけれども、アモン先生は統計学のことについては全くお触れにならなかったという感じでございますか。

高橋　アモン先生は、統計学としては何もおっしゃらないけれども、お供をして丸善に行くと必ず社会科学の部と数学の部をごらんになる。それで、やはり近代経済学の人は数学などもおやりになるのかなというふうな形では考えさせられましたが、統計とか統計学についてどうということは、アモン先生からは聞いた覚えはないですね。

大屋　大内先生のこととか有澤先生のことはまた後でも何回かお聞きすると思いますが、そのころ大内先生はもう外国から帰って、講義なさっていましたか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

高橋　私の最終学年の3年生のときに先生はヨーロッパからお帰りになった。帰ってきてからの最初の講義が社会政策なので、それを聞いたんじゃないでしょうかね。そしてだんだん大内先生に傾倒するようになっていったんですね。

大屋　有澤先生はそのころ助手になっていらっしゃったわけですね。

高橋　そうです。私が学生のころはすでに助手になっていたんですね。まだ個人的には存じ上げてはいなかったんですが。

大屋　こういうことをお聞きすると失礼なんですが、先生は高等学校のときには文科甲類ですね。統計学というのは、文科甲類というよりはむしろ理工、数学系に偏った学問だといまはなっておりますけれども、そのころは、有澤先生も文科だと思いますが……。

高橋　有澤さんは文科乙で、ドイツ語じゃないですか。甲というのは英語が主です。

私はこれでも中学生のときは、理科や数学が得意だったのです。それで二高へ入るときも、中学の先生は当然理科に行くものと思っていた。口下手だし、内気だし、いまのようにずうずうしくなかったから、理工科へ行ってじみにやっていったらいいといわれました。

ところが、字が猛烈に下手、用器画なんというのもかけないのです。何遍かいてもダメなんです。理工科へ行くには製図をかかなくちゃいけない。それで失格だ。それから、これは、ここには女性がいらっしゃるので困りますが、そのころ春機発動期になりまして、代数の根と係数のことなど怪しくなってきたんです。頭がもやもや

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

してきて、とても数学のような緻密な学問には適さないということになった。それからもう1つ、社会主義というのはオーバーですけれども、そのころロシア革命や米騒動がありました。また、中学時代から新聞配達などアルバイトをやってました。そんなこともあって、政治、経済、社会といった勉強をするのがいいんじゃないか。そして労働者にわかる言葉で語りかけるようになりたい。それで理工科の方へ行かなかったのです。

大屋　私も、ちょうど兵隊から帰ってきてから一番強かったのは数学なので、友人連中はみんな数学に行くものと思い込んでいたようですけれども、これまた妙な縁で経済学なんかやり、やっぱりもとに返った、という感じをいまになって持ちます。けれども、統計学というのは、何らかの形で数字的なものとのかかわり合いが資質の中にないと育たないのかもしれませんね。

それで先生は、有澤先生と一緒にいろいろ勉強されたみたいですけれども……。

高橋　私が卒業したときに、有澤さんは、助教授だった。そして、小田忠夫という、いま私が勤めている東北学院大学の学長が私と中学以来同期なんです。その小田君が仙台以来有澤さんと非常に親しいんです。このごろは出ませんが、「忠夫さん」というのが有澤さんの口から出たくらいです。有澤さんの家に下宿していた。

そこで、私が助手になるとき、小田君が、助手になるなら試験のコツをとはいわないけれども、学校のことも聞いたらいいだろうというので、小田君が私を有澤さんに紹介してくれ、初めてお目にかかったのです。私が助手になって1年ぐらいしないうちに有澤さんはヨーロッ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

パへ行ったんじゃないかな。

有澤さんは、助手のときは経済原論専攻だったんですね。そのころ統計学は糸井靖之という先生がなさっていたんですね。矢内原忠雄先生とも親しい人格者で、りっぱな方だったようです。その糸井さんが在外研究中にドイツかどこかで亡くなられた。その後任が問題となった。高野先生は糸井さんの不在の間ということで講師として講義されていたのではないかと思います。それで有澤さんですが、糸井さんのゼミの学生として米価変動に関する統計的研究といった論文を書いていた。それが非常に優秀なものだったということもあって、統計のおはちが有沢さんに回ってきたんではないでしょうか。経済学の理論的研究から統計学へ、ということで有澤さんに煩悶があったかどうか知りませんが、経済学の理論的研究と経済の統計的研究とをおやりになるようになったんだと思います。

私は大学を卒業する間際まで、研究室へ残るなどとは思っていなかったのです。土方成美先生という非常にいい先生がいまして、その先生のゼミを2年もやりました。それから、第三外国語というので、フランス語経済書講読という人数の少ないクラスだったということもあって、毎週のようにご自宅へも行って勉強させられるほどの仲よしになりました。卒業のときにわざわざどこかで洋食をごちそうになった。うちが貧乏で母親を抱えているから、生活の安定を欲するということになって、じゃ安田銀行を紹介しようということになり、安田銀行の頭取の結城さんですね——後で日銀総裁になった、あの人にわざわざ紹介状を書いてくださった。安田銀行へ行って面

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

接して、それから型のごとく採用試験を通って採用内定したのです。

ところが、履歴書を書くのに、そのころは墨で書くのです。あんなばかなことはぼくはできない。そこで、友人にみんな書いてもらって出したのです。就職が決まったら、高校のクラスメートで後で通産次官になった奥田新三君がやってきて、「おまえ、あんな履歴書を書いて銀行へ入ったら、すぐばれるぞ。大体おまえが書いたんじゃ、金額も、貸したか借りたかわからないじゃないか。つまらぬことはやめろ。おまえはとても銀行マンなんかには向かないから」といわれた。

ちょうどそのとき、助手の募集があった。助手を志願したらどうだといって、助手試験で提出する論文を清書してくれたんです。それで助手になれたのです。その前に土方先生に相談したんです。先生としては恐らくむっとしたでしょうね。研究室へ入れば大内一派の世界ですからね。いじめられるに決まっている。かわいそうだと思ったのかもしれません。じゃ何を専攻にするかということになって、統計でもやっていれば、2年で首になっても社会に出て保険会社に勤められる。そこで統計学専攻の助手になったのです。その辺のこと、私からすればきわめて自然の成り行きで、右往左往の一幕だったんですが、土方先生からすると、ある意味では非常に予期に反したことを私がやり出したことになったのかもしれません。

先生はパリ仕込み。男前もいい。スマート。講義にも熱が入ってました。教室は超満員。「マルクス主義者よりも、ぼくの方がラジカルなんだ」と、文字どおり獅子吼

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

する先生でした。経済は、したがって経済学は、生産力――生産諸要素――と生産物――いまならGNP――の配分に関するモノだというのです。それで土方の「配分経済学」といわれたりしました。フランスでの研究の成果だったのでしょう。現在でも大いに通用する考え方だと思っています。それで、研究室に入ることになったとき「いまどきマルクスをかついでいる連中が研究室にいるらしい。先生の経済学で彼らを克服しますよ」と豪語したんです。身のほど知らずもいいところですが、その私が研究室で主任大内に傾倒するようになったのですから、こっちは無邪気でも、土方先生としては「裏切り」とお感じになっても無理はないですね。やがて「破門」、助手で首になるタネを自分でまいていたわけです。

それで、研究室に入ったら、有澤先生も統計、ぼくの方もそう。一高の数学の先生で、何とかいう先生がいるのです。そのころですから、数理統計か何かの先生です。それで、有澤さんとぼくは、その先生のところへ家庭教師みたいに毎週1回ずつ通ったんです。

しかし、有澤さんも社会主義づいていたころだし、2人ともなかなか勉強しない。ところが、1対2ですからサボるわけにいかない。もっとも有澤さんの方はぼくよりは断然まじめでしたが、赤門のわきに喫茶店青木堂がありました。そこで2人でお茶を飲みながら、きょういかにごまかそうかと相談したことがある。向こうは専門家だからごまかせない。(笑) それで四苦八苦して、それが半年以上続いたんですかね、微分、積分、何とかというのをずっとやったんです。

そのうちに向こうの先生から破門されたんだな。(笑)

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

向こうで忙しいといったのか、あなた方は見込みがない——そんなことはいわないが、何かで破門になっちゃった。有澤さんの名誉のために、ちょうど有澤氏は外国へ行くことになったから、それもあったでしょうね。

そのころ、有澤さんと同期の助教授に大森義太郎さんがいた。有澤さんと大仲よし。自分のあとは何でも大森君と相談するようにといって有澤さんは外国に行ったんです。大森さんは、経済原論、経済哲学。映画評論も玄人並みにやる、いい意味での才人、江戸っ子。初めは新カント派だの、ドイツの西南学派だの、文化哲学だのと盛んにやってもいましたが、時代の流れ。だんだん実践に深入り。山川均、荒畑寒村、鈴木茂三郎、黒田寿男の皆さんと「労農派」を結成。それが私の助手のころ。私は大森さんの洗脳で労農派になったんです。有澤さんも洋行前は大森さんと同じ動きをしていたはずです。そういう状況では数学には身が入らなかったのでしょうね。（笑）

西平　一高の先生というのは黒川先生ですね。

高橋　そうです。非常にまじめで無口な先生で、こっちが何にもいわないと向こうも何にもいわない。四方山がない先生ですから、あんなに苦しんだことない。大変いい先生です。

大屋　高野先生からは、そのころ直接、研究会とかなんとかで統計学とかマイヤー（G. von Mayr）の話は----。

高橋　マイヤーとかなんとか聞いたことはありますが、何も覚えていません。先生が東京の下町の方で実態調査をやっていた、その話を盛んに聞かされました。自分が調査したのを自分でそろばんでやっているんだという話

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を聞きました。手工業時代の統計の実証的研究家の苦労を大いに教わったわけです。

これは後になりますけれども、高野先生の長男が九大の農学部の学生でした。そんなこともあって、いつの間にか高野先生の奥さんなどとも交渉するようになった。息子のことで相談を受けて、北海道の農学部に入るか、九大の農学部に入るかということになって、ぼくが「北海道は寒いからダメですよ」といったら、彼女はドイツ人ですね。すぐ緯度を持ち出して、ベルリンは北海道よりも北だという。「寒さは何でもない」という。「あなたはドイツのことを考えている。日本の北海道は違う」といいました。そのせいばかりでもないでしょうが、九大に入ったのです。宇野弘蔵先生の奥さんの弟さんですね。彼と2人でよく写真を写したり何かして遊びました。そんな関係で高野先生の家へも遊びに行くようになりました。

大屋　先生が研究室時代にご記憶に残っていらっしゃる統計家とか統計学者、非常に少なかったと思いますけれども、そういう方はいらっしゃいますか。

高橋　高野先生からマイヤー、チィゼーク（F. Zigek）というのを聞いたことがある。それからボーレー（A. L. Bowley）は盛んに聞かされました。それからフランスのシミアン（F. Simiand）、そんなのも聞かされた。そのころのぼくは、統計学の勉強に数字は使うけれども、数学と非常に深いかかわり合いがあるのかというようなところまでは考えていないですね。

大屋　芥沢光治良は、フランスでシミアンについていた

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

んですね。東京へ帰ってから法政大学で統計をやるようにといわれていたというようなことを『人間の運命』か何かに書いていました。最近、岡山大学の杉森君というのが、シミアンの業績を調べているようです。

高橋　芹沢光治良というのは、九大の菊池勇夫君の親友ですね。

そのころ統計というと、労働者に限らず、生計調査ですね。それから農業統計。

大屋　やっぱりそれはエンゲルの影響なんですね。

高橋　それから、さっきアモンのことをお聞きになったけれども、アモン先生の前にレイデラー（E. Lederer）先生が来ていた。レイデラー先生が、大森義太郎だの有澤広巳――まだ助手だったんでしょうね、その連中をつかまえて、日本の学者は抽象理論的なことはいうけれども、日本の実態については知らな過ぎる。レイデラーはちゃんと日本の統計年鑑か何かを持っていて、日本のことを知っていていろいろいうので、大いに啓蒙されたというようなことを聞いたことがあります。

有澤、大森お2人はレイデラーと人間的にも非常に親しかったようですが、研究上も大いに得るところが大きかったんではないでしょうか。家が近かったので私は訪ねていって「議論」もしました。関東大地震のとき、軽井沢から帰ってきて、これがドイツなら革命が起こるといいながらも、大都会東京の人口が一夜にしてゼロみたいになった。それだけ「帰農」「帰郷」の可能性があるんだ。そういって日本資本主義と「近代化」のことを話してくれたのを覚えています。

統計以外のことばかりで恐縮ですが、私は人一倍マル

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

クスかぶれだったことがあるんですが、それでもレイデラー先生から「反省」のタネをいただいてはいるんです。それは、自由競争段階の資本主義は『資本論』で割り切れるが、独占段階の資本主義は近代経済学――そのころは限界効用学説――でなければいけない、というんです。ユダヤ人だったのでヒトラーになってからアメリカ。私はヨーロッパからの帰りにニューヨークの郊外の家に行きましたが、議会で専門家として経済問題について証言するなど活躍してました。しかし、こちらの思いなしのせいか、「故郷、忘れがたし」といった「亡命者」の感じを受けました。そのときは有澤さんたちの大内グループはまだでしたが、大森さんたち労農派は逮捕されていました。古びた小さい部屋で、大森さんからもらったのだという掛け軸の前でのひとときはさびしいものでした。健康でない大森さんのことを、自分もそうだといって、案じていました。

脱線ついでにアモン先生のこと、いわしてください。先生は近代経済学の大家だといっていいですが、マル経は解剖医学、近経は臨床医学に当たる。まともな経済学者は両方をやるべきだといってました。阿部勇君と私との共訳『経済学建設者としてのリカード』ではリカード以後の第一人者としてマルクスを挙げていますが、1937年、夏、2カ月をスイスの先生宅にいたときは、ケインズを経済者のケネー以来の人だといっていました。統計以外の統計学者の発言（笑）、これで終わります。

大屋　先生の助手時代の最初の論文というのは、統計学に関係のある論文ですか。

高橋　「国民所得統計序論」ですか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　それは後ほどまた先生が、ある時期、国民所得論をおやりになるきっかけになりますか。
高橋　統計方法を客観的方法とか主観的方法とかと、何のことかわからずに論文で書いた覚えがあります。それが助手の最初の論文です。何せ統計の助手だから、研究論文は統計にしなくちゃならない。
坂元　高橋先生は、月島調査に駆り出されたことはないですか、高野岩三郎先生の。
高橋　関係ありません。
大屋　もう終わっていたわけですね。
高橋　そうですかね。そのときは先生はＩＬＯの代表問題がこじれて学校をやめられて、私のときは講師で、大原研究所長で、ただ従来の関係があるから講義に来ていたわけですね。
　私は新人会にも入ってないのです、あのころの若い人はみんな入っているんだけれども。だれかが、「新人会なんかに入ると助手になれなくなるので、あいつは入らなかったんだろう」といっているようですが。そんなことないんです。たまたま勧誘されなかったんです。友人はみんな入っていますから、構わずつき合っていた。いまでも新人会の「同窓会」には出ることがあります。みんなそのつもりでいるから。こっちはただ入らなかっただけです。

大屋　先生が九大の統計学担当というような形で赴任されるいきさつみたいなものを……。先生は、九大の統計学講座の初代ですね。
高橋　助手になるときに長老から、２年たって大学から

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

「ＸＸを命ず」の意思表示がなければ辞表を出すことになっているんだ、というふうなしきたりをいわれました。大体そのころは、助手になれば講師、助教授になれるというふうな慣習でもあったんだと思いますが。

ところが、２年たっているうちに東大経済学部の中がごたごたになってきた。いわゆる左右対立が激しくなった。私はいつの間にか大内一派ということになった。さっきお話しした土方先生から破門されちゃった。土方先生の方が学内で絶対多数になって、それで２年で首になることになった。

２年でお呼びがないから、辞表を出すべきなんだけれども、大内先生が、「おまえは国家公務員だから、悪いことをしなければ首にならない。辞表を出さないでがんばれ」というので、もう１年がんばった。偉い人たちは、「あいつは一体どうしたんだ」といっていたらしいんです。こっちもどうもしないでいたら、ちょうど３年目の終わりになって、山崎覚次郎先生から、「ああいう約束じゃなかったか。われわれも就職口を探すから、おまえも探せ」といってほうり出されることになった。

そこで、大内兵衛先生や大森氏なんかが心配してくれて、全国で統計学の空きのある大学を探したら、東北大学と九大にあった。そこで岡崎文規さんも高橋正雄も東北大学をねらった。後で２人で、市場協定をやればよかったなんて……。彼は京都から行き、ぼくは東京から行った。そこでぼくの方は、まだ助教授の宇野弘蔵さんを通じて運動した。向こうは堀経夫さんを通じてやった。はち合わせしちゃって両方ダメ。私は何度も仙台へ行って、その関係で宇野さんだの奥さんと非常に仲よくな

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

たわけです。

ここで美濃部亮吉君が登場するんです。第1の論文がマルクスなんか出てこないような「国民所得統計序論」を書いて、第2番目は、実証的なものを書かなくちゃいかぬというので、何を書いたか覚えてないけれども、とにかく数字をべたべた使って、東大の国家学会雑誌に論文を書いた。

その論文が載っている雑誌が、美濃部君とおやじの達吉先生が飯を食っているところにほってあった。それをおやじさんが見て、自分の息子も危ないのを知っているし、私も助手なもので、「こいつは一体どうなっているんだ」と亮吉君に聞いた。亮吉君が謀略をめぐらしたかどうか、その辺は怪しいんだけれども、「こいつは首になることになっているんだよ」というと、「行き先があるのか」「なくて困っているんだ」という問答。「じゃ九大で拾ってやろうか」と。このツルの一声。美濃部達吉先生ほどの大先生でも、東大の構内で私とぶつかると、向こうが頭を下げて、「亮吉がお世話さま」といって-----。親になるものじゃない。(笑) ここで都知事になったよりも偉大な美濃部君の歴史的発言。「高橋って赤でないだろうな」と父。「ウウン、オレとおんなじだよ」と子。ご時勢ですね。(笑)

高田保馬先生が九大の経済科のキャップだったものですから、美濃部先生から高田先生に、こういう男を採ってほしい。自分は経済学のことは何も知らないから、高橋の後見人として大内を指定する。大内、高田の間でいいと思うなら採ってくれという手紙を出した。たしかその手紙も、美濃部先生は私に見せてくれたと思う。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

やがて高田先生から大内先生にきわめて懇篤な手紙が来た。ところが、この2人は五高以来のライバル。高田先生から来た手紙が、それこそ歯の浮くようなお世辞たらたらの文章で、「おまえは世界的な学者になって東京で花と咲いてうらやましい。オレは田舎でくすぶっているんだ」と書いてある。それを大内先生が私に見せて、「高田って男はこういう手紙を書く男だ。用心しろ」といった。

高田さんが、東大出身の高橋を助教授にするべく教授会に出した。本来なら、向坂逸郎とか石浜知行というふうなやや左がかった教授たちは、高田さんが出すのに反対するに決まっていたんですね。それを高田さんが出したときに、向坂さんも石浜さんもその場でオーケーしたんですね。それで2人とも後で、あれはまずかった、少しもむんだったと……。その前にこっちは、大森さんを通じて内部工作していたんです。もし2人がごねていたら、3.15事件になりますから、私は行けなくなってしまったかもしれないんです。実にこの男は運がいいと自分で思っているんです。

それで九州に行って統計学を講義することになった。理学博士で統計学の本を書いた人がいましたね。小倉さんかな。

大屋　『統計的研究法』、小倉金之助。

高橋　あの本が出る前だったので、有澤さんから、「この本でも翻訳しながら講義に使え」といって、だれかアメリカ人の統計の本を教えてもらった。

大屋　キングか、ミルズか……。

高橋　ミルズだったと思います。そういうことをやって

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いました。

それで九大へ行って、統計学の講義を始めた。小倉さんの本が出てからはあの本のことをやった。それから統計学史、高野先生から聞いた国勢学というのをやって、そのころから、国勢と統計学と社会体制と関連なくはないというふうな意味で、自分で統計勉強の意義は感じていたわけですね。

大屋　森田先生の本の中にも、東北大学の統計学講座のことについては、米澤先生まで全部空白みたいな感じなんですが、先生が九大においでになって、あと東北大学はどなたがいらしたんでしょう。

高橋　だれもいないの。じゃ、宇野弘蔵とけんかして、だれも採らなかったのかな。米澤さんはだれに習ったかしら。彼は東北でしょう。

西平　東北ご出身ですね。和田佐一郎という方が……。

高橋　そうそう、和田さんですね。知ってます。ぼくらより大分古いけれども。

西平　東北大学では、この方が第1回の学会の会員ですね。それから、理学部の林鶴一という方が、数学だろうと思いますけれども。

高橋　林さんという方は、中学校の教科書なんかに書いて、そういう一般教養にも関心があった先生だった。

大屋　お2人が東北ですね。そのせいでしょうね、余り言及されてないものですから。

財部静治さんは？先生はそのころご存じですか。

高橋　名前は知っていました。高野先生からさんざん聞いているんじゃないかな。

大屋　藤本幸太郎先生とはどういう……。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

高橋　どこかで会ったことはあると思いますけれども、別に人間的な……。

それから名古屋にもだれかいましたね。

大屋　郡菊之助さんですね。

九大での統計学の講義というのは、小倉金之助氏のあれですね。

高橋　そうですね。

大屋　有澤先生の「統計学概論」か何か本がありますね。

高橋　弁証法が入っているのがあるでしょう。

大屋　恐らく反デューリング論から引かれているだろうと思いますけれども、ああいうのは当時だれもやっていなかったことなんでしょうか。

高橋　だと思いますね。蜷川君とはわりあい親しくはしていたんだけれども、しかし、統計学の点での交友ということにはなっていないですね。

森　高橋先生が九大に行かれる前は、九大では統計学の講義はなかったわけですか。

高橋　初めてできた学部ですから。私が行ったころに法文学部ができた。

大屋　高田保馬先生が統計学らしきことをいっていますね。

高橋　高田さんならやれるはずですね。

大屋　大数法とか……。

高橋　あの人は社会学出身だから、経済学も統計学もやれるはずですよ。ですから、九大で法文学部ができてすぐに統計の講義があったとすれば、高田先生がやっていると思いますね。

大屋　高田先生がやっていらっしゃるあれで、栗村先生

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

は当然統計をやるつもりじゃなかったんでしょうか。

高橋　さっき高田先生が大内先生に書いた手紙の話をしたでしょう。それで私が、ちょうど母親が病気だったもので、辞令が出てもなかなか行かなかったら、九大から、早く来いとしかられた。博多へ着いたら大学の人が、「すぐに高田先生のところへあいさつに行け」という。佐賀県の小城まで、着いた日に行った。そうしたら、これは高田先生の一大失策だと思うけれども、そのときの最初の言葉が「ぼくは大内君などは学者とは思ってないから」。私は、彼が大内さんに書いた手紙を見ているでしょう。だから、ああ、こういう男かと思って、こっちは人間的には非常に気が楽になった。(笑)

そのころ、大学は森耕二郎という河上肇のお弟子さん、これも京都を追い出され組。森君と私は大の仲よしになった。高田保馬は、私が九大の雑誌に何か書くとすぐ「高橋君、研究会をやろう」といって、若い人を集めて研究会を開く。マルクスのぼろを引き出そうと思っている。こっちは本当は『資本論』によっているんだけれども、私の言葉でやっているから、ぼろは出さない。大家の高田と駆け出しの高橋が遠慮なしに議論するので身のほど知らずともいわれましたが、高田さんの意図はどうあれ、私としては、彼との対決を通じて非常に勉強になった。その点は感謝してます。この他流試合、どれだけ勉強になったか知れません。そのうちに私を呼んで、「おまえは統計学をやらなくてもいい。ほかの科目にかわってもいいんだぞ」という。つまり、統計学から外そうとしたわけですね。

それから、いまは講座制度というのはないでしょう。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　あります。
高橋　ありますか、失敬。私が行ったときは統計学の講座があって、その助教授だったから、当然その講座担当になるはずなのに、なかなかしてくれない。そのうちに、さっきいった森耕二郎だけは、社会政策の講座担当になった。

それで私が、「オレは差別待遇にがまんできない。辞表を出して東京へ帰る。そのかわり黙ってはいない。いかに九大経済学科がひどいかを東京の新聞に書いて暴露する」と脅迫した。そうしたら講座担当の助教授になった。（笑）それで九大では、「あいつは何たるやつだ。自分で自分の講座を取っちゃった」と悪名天下にとどろいた。（笑）私はこうして統計学講座担当助教授になったんです。統計学を勉強しない男ですから、公平にいって、高田先生がワルだったとはいえませんね。（笑）
大屋　話は少し後になりますけれども、1930年ですか、第1回国際統計会議が東京で開かれていますね。それは先生ご存じですか。
高橋　何も記憶ないですね。
大屋　森田先生のあれによると、森田先生もそれに出席していない、そのときに出席を要請されなかった若い人たちの間で、日本統計学会をつくろうという機運が盛り上がってきたというふうに書いていらっしゃいますね。
高橋　有澤さんは……。
大屋　有澤さんは出ていらっしゃいますね。蜷川さんも出ていらっしゃいます、招待で。だから、東京帝国大学と京都帝国大学は招待があったわけです。もっとも、その中には中川さんとか郡さんも呼ばれていらっしゃいま

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

す。中川さんは統計局の職員として入っていらっしゃるようですね。だから、中山伊知郎先生も水谷一雄さんもご出席じゃないのですね。それで、水谷さんや中山さんや森田先生なんかが、学会をつくろうじゃないかということで有澤さんに相談を持ち込んだということになっていますね。

そのころのことは、先生は九州だから……。

高橋　そのころは、大内、有澤氏は東大経済学部教授会から疎外されていて、神田に研究所を持っていた。私は休みごとに東京へ来てそこに入りびたっていたけれども、その国際統計学会のことは知りません。

大屋　日本統計学会の創立総会みたいなのはご記憶ございますか。

高橋　これも森田君の本を見て、ああそうかと思って……。

大屋　これも昭和6年ですが、改造社から『世界経済統計図表』が有澤先生との共著で出ていますね。ああいう発想は有澤先生とお2人でやられたわけですか。

高橋　やれよと勧められはしましたが、内容の点はどうでしょうか。お知恵拝借は大いにあったと思いますが。

大屋　改造の編集部であいう企画をやったわけですか。

高橋　たしかそうですね。有澤さんと私とで一緒にやるようなあれもないし……。それで私が、とてもうまくできないので、おりようかといったときに、有澤さんが、初めから完全なものができるはずないから、がんばれといって励ましてくださった。そういう点で相談に来っていただいたかもしれない。その辺は怪しいな。

大屋　戦後、岩波新書から『日本経済統計図説』とか『世

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

界経済統計図説』が出てますね。あれは、片方は大内先生で、片方は美濃部先生ですね。だから、そういう発想は先生方のグループの中で、この改造時代にあったのかなと……。

高橋　それは非常に好意に満ちたあれなんですが、怪しいね。(笑)あれは改造社が出して、有澤さんはどっちか受け持ってない？

大屋　世界経済の方が、先生と有澤さんとの共著になっています。

高橋　日本はだれになっている？

大屋　日本もあります。(高野岩三郎編『本邦社会統計論』)

昭和7年に中国へ旅行をなさっていますね。あれはゼミ旅行ですか。

高橋　いや、違います。あれは満州事変があって、外務省が3カ月か半年か、かなりの期間満州出張で調査してこいという話があった。その前後2度ぐらい行きました。

大屋　8年にいらっしゃっていますね。

高橋　8年の方が詳しいやつでしょう。最初の方は、法文系の3科の研究室主任が、お金が余っているので出張してこいというようなことで、民法の船橋諄一君と私ともう1人、早く亡くなった仏文学の人と3人で満州へ行った。これは10日ぐらいで帰ってきた。後の方が外務省と文部省の出張命令で、チチハルからずっと歩きました。非常にいい勉強をしてきました。それで満鉄の調査局の人と仲よしになった。

大屋　それは実態調査という形ですか、それともヒヤリングの調査ですか。

高橋　もっぱらヒヤリングですね。統計とはおよそ縁の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ない政治、経済、軍事情勢ばかりでしたが、それでも実証的なことも忘れてはいなかったつもりです。後で戦犯にされた板垣征四郎大佐(?)が満州軍参謀長でした。その実兄だった九大医学部教授から紹介されていって会いました。その関係で軍の青年将校たちとも満州経済論、大東亜共栄圏論——文学的に今流にいえば大東亜EC(経済共同体論——を資料に基づいて遠慮なく討論しました。いまは、あなた方は、「大資本入るべからず」などと空想論をやっているが、やがて大資本・財閥資本が支配権を握るようになるに決まっている。私がそういうのに対し「そんなバカなことはない。必ず日満友好の王城楽土をつくってみせる。数年たったらまたやってきてみなさい」と青年将校から反論されたのを覚えています。それやこれやで満鉄調査部関係のまじめ人々の指導者だった橘樸さんとも親しくなり、後で上海に来られたころ、その著書の序文を書かされたりしました。

大屋　その年に改造から「本邦所得統計論」という本が出ているんですね。

高橋　ぼくのですか。安部磯雄と違う？

大屋　いや、先生です。著作年表から引いたわけです。どうもそれが先生の助手論文を大きくしたやつじゃないかと思います。何人かの学者の所得に関する定義をお書きになって、それから明らかにマルクスの生産的労働の原理から発生する所得論があって、それを統計に結びつけたみたいな形のものですね。

高橋　初めて伺いましたね。(笑)困ったな。

大屋　恐らくそれが助手論文じゃないでしょうか。さっきお話がありました内容のようですね。助手論文をその

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ときに拡大して本にされたんじゃないかと思います。
高橋　助手のとき最初に書いたのは、こういういきさつだったんです。大内先生に呼ばれた。口頭でこれこれのことを書きたいといった。先生からさんざんやっつけられて、紙に書いて持ってこいといわれた。大学ノートに行をあけて書いて持っていった。先生が原形が見えなくなるほど朱を入れる。また持っていって書き直して、また手を入れてもらったんです。それが経済学部の機関誌に載った。研究会の席で、大森義太郎さんが「何だ、これ高橋のか。大内先生のかと思った」といった。(笑)つまり、それほど大内先生の手が入ったものです。それを拡大して、いまあなたがおっしゃっている本にしたのですかね。

大屋　文部省の在外研究員は1936年からですね。
高橋　そうです。
大屋　海外で印象に残った統計学関係の人はご記憶はございますか。
高橋　国際統計学会があったのは、ちょうど私がヨーロッパにいる間です。そのときはギリシャのアテネにあった。そこへ行きました。そこで川島統計局長とパリから同じ汽車だったのか、会議では一緒になった。戦後は統計制度の改善なんかでもときどきお会いする機会がありました。
　それから、私にとってある意味で忘れられないのは、アテネでライス(S. A. Rice)さんと会っていることです。そのときは向こうは錚々たる大家。こっちはたまたまヨーロッパにいたから来たというくらい。何でもな

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

かった。しかし、センチなことをいいますと、春風秋雨16年、東京の占領軍統計調査部室でライス、高橋の再会ということになります。アテネでは物価指数のフィッシャー(I. Fisher)とか、その他の経済学者と古跡見学のバスで一緒でした。

たまたまフランスが金本位を離脱した最後の国だった。みんなで為替相場の話だの為替と物価の話だの議論した覚えがあります。しかし、だれとだれだったということは全然覚えておりません。

大屋　その次の総会がプラハで行われていますが、それは先生ご記憶ございますか。

高橋　知らないです。

大屋　森田先生はプラハの国際会議に出ていらっしゃるようですね。

高橋　そうでしょうね。アテネのときは、森田君はもうヨーロッパに来ていたかもしれませんね。私がロンドンの下宿にいたら森田君がやってきて、一緒に食事をしたりダベったりしたのを覚えていますから。

大屋　そのころからもう森田先生とは親交があったわけですか。

高橋　そうですね。あちらは申し分のない紳士、こちらは野人。それでウマが合うのですね。それが戦後に復活したのです。

大屋　汐見三郎先生のことが盛んに出てきますけれども、先生は余り……。

高橋　交渉なしです。

大屋　ドイツの大学の統計学者をそのころお尋ねになったあれは……。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

高橋　アモン先生の家に行って、そこへハーベルラー(G. Haberler)、それからウィーン学派のハイエック(F. A. von Hayek)とかモーゲンシュテルン(O. Morgenstern)とか——アモン先生の紹介があってモーゲンシュテルンの家に行ったりしたことがあります。しかし、特に統計ということではないです。帰ってから勉強しようと思って、ウィーンで新ウィーン学派の理論的、実証的な本を買って日本へ送ったんですが、警視庁がとったのかどうか、とうとう手元に着かずです。

大屋　先生が向こうから送られた本は福岡県警に行ったままで、先生のお手元には入ってないんでしょう。

高橋　県警にも行ったかどうか。アメリカでもちょうどルーズベルトのニューディールのころだったので、かなりどっさり本を買って日本へ送ったはずですが、九大まで着いてなくなったのか、わかりません。戦前から研究室にあった本は後でとりに行って、戻ってきましたけれども。

大屋　留学時代には、統計の勉強よりもむしろ社会的な方面の方が……。

高橋　そうです。実質は労農派から派遣されたつもりでありましたから。もういってもいいと思うけれども、ヨーロッパへ行く前に大森さんと「武士の誓い」をしていたんです。外国を見ておかないと、大きなことがいえない。後で運動をやるときに不便だ、どうせ帰ってきたら飛び出すんだけれども、ネコをかぶって外国だけは見ておけというのです。いまと違って、「洋行」が一生のうちに二度できるなどとは思えませんでしたから、ヨーロッパにいる間はもっぱら社会主義、労働運動という点で動

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いていた。ですから、あとはもう文部省と大学の手前、しかられない程度にやるということで……。そう思いながらも、一方では、九大へ戻ったら落ちついて一生懸命勉強してやろうとも思っていた。いまもそうですが、二足のわらじを考えていたんですね。

大屋　ロンドンでは、佐藤良一郎先生とかそういう方とはお会いにならなかったですか。

高橋　知らないですね。知ってるのは、一橋の山田雄三君です。それから柴田敬君、アメリカで都留重人君。

大屋　九大の初期のころの経済学のゼミナールは、やっぱり実証的なことですか。

高橋　そうですね。国禁の書ではないんですが、ソ連のヴァルガは読めないから、『エコノミスト』があったとすれば、ああいう雑誌だね。

大屋　われわれのころは『経済白書』でした。

高橋　よく就職のときは高橋のゼミに出ているというと点数がよかったと学生がいっていた。イデオロギーものでなくて実証的ものをやっていたということですね。戦前は何か、そういう雑誌を使っていたんでしょうね。

大屋　1938年にアメリカから帰ったところを横浜で逮捕されましたね。それ以降は終戦まで、統計とのかかわりは切れたということになりますか。

高橋　そうですね。その点は統計学だけでなく全く空白ですね。

ただ、保釈されてからは、上海にあった大陸新報の嘱託という関係で大陸研究所をつくることになった。そこで日中関係の資料というような意味で、資料的には統計の問題に関心を持ちました。大内先生が顧問格、早く亡

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

くなった南謹二君、いま元気でいる専修大学の西田勲、白柳夏男の両君、名和統一君のお弟子さんの小野君、もう1人尾崎秀実君のお弟子さん、時局柄ヒソヒソという形でしたが、内実は大いにやっていたのです。アダム・スミスの『道徳情操論』の訳者米林富男君が経営していた出版社の2階が研究所でした。米林君ももちろんメンバーで、桐島洋行さんのお父さんだった龍太郎君が大陸新報の出資者でもあったんですね。神田の救世軍のすぐそばでした。近所のおでん屋で昼飯を食べながらやり合った。南君など最期まで楽しかったといっていました。

大屋　戦前に先生は、たとえば杉享二――もう亡くなられていますね。

高橋　そうですね。もう知らないですね。

大屋　1945年に横浜正金銀行の嘱託になられて、それからGHQにお入りになりますね。GHQにお入りになる経過というのはどういう……。

高橋　昭和12年の末にロンドンからアメリカに渡りました。そのときに、柴田敬君の紹介でハーバードの都留さんが1日案内してくれた。非常にお世話になった。彼と仲よしになったわけです。

それから戦後になりました。私は、外国に行っている間に、各地の横浜正金銀行の支店で文部省から送ってもらう金を受け取っていた関係で、正金の若い連中と仲よしになりました。木内信胤とか堀江薫雄とかいうふうなのと仲よしになった。木内さんとは上海でかも。戦後彼らが、浪人している私を救うという意味もあって、正金銀行の調査部嘱託にしてくれた。そこで、外地から帰っ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

てくる青年行員に日本帝国主義のイデオロギーではなくて、日本民主主義のイデオロギーを注射する役を承ったわけです。社会主義でも結構というご時勢になったんです。毎日楽しく勤めていました。

ある日、都留重人さんがアメリカ人をつれて私のところへ来た。今度占領軍の経済科学局に調査統計部をつくることになった。その方の日本人側のチーフとしておまえを推薦したい、自分は年の関係があるからサブということでやりたい、と勧めに来た。私は、九大にバックする話も始まってはいたと思うのですけれども、唐人「お吉」になってアメリカ屋敷を見てやろうと喜び勇んで占領軍に入った。都留さんと一緒にですね。それが占領軍に入るきっかけですね。

大屋　GHQ内部のこと、あるいはGHQと統計とのかかわり、日本政府と統計とのかかわり、そこらあたりはある程度は『日本統計制度再建史』（日本統計研究所 1963年）の中に出てきますけれども、裏話みたいなのはなかなかわかりませんし、この機会に先生が思い出されるまま、できるだけ詳しくお伺いしておきたいと思います。

高橋　経済科学局の統計調査部に行ったときに、日本人を採用するのが私の責任みたいでした。私はどんどん失業インテリを採用した。それから、私が入っていた部は、近藤康男君が関係していた農業関係の方は除いて、あとは労働力調査、CPSの調査、それから国勢調査関係の項目に関することは多分みんなやっていたんじゃないでしょうか。

そこでいろいろな係があって、それぞれの係が、労働

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

省、通産省、日本銀行、いろんなところの人を呼んでは、それぞれの分野での調査方法や統計資料なり統計機構の整備ということをやっていた。占領軍の連中は日本側と接触して指導といいますか、日本の事情を的確に把握しようとした。これは私の発明かどうか困るんだけれども、占領軍は統計をもって日本を支配しようという方針だった。われわれは長く日本にはいない。アメリカ軍が撤退した後で日本の社会、経済、政治状況がどうなるかを一目瞭然把握するには、信頼に足る統計調査機構ができていることが必要。その結果を見ていれば遠くにいてもわかるようにと、そういう方針を占領軍は統計については持っていたんじゃないか。

それは私の立場からいっても、日本を社会主義にするにせよ、何にせよ、客観的なデータが客観的に集まるような機構をつくることが必要だ。それに協力するのは少しも恥ずべきことではない。向こうの魂胆は日本を支配するためかもしれないけれども、それに協力することは、私からいえば、私の目的にも100%通ずる。矛盾とか後ろめたさなど感じませんでした。それもこれもお国のため。(笑)

戦争直後は旧敵国軍隊の指令で、しかもその「傭兵」として動くというのは、日本魂に反するんじゃないけれども、まともなインテリとして恥ずかしいという空気がかなりあった。都留君も、自分がチーフになればいいのに、私のところへ来て「おまえが行くならオレも行く」なんというような、私を隠れみのというんですか、高橋が行くから行くというんです。こっちはちっともそんなことはないので、堂々と行った。しかし、私たちのとこ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ろで労働組合が生まれた。私はそれに加入したかどうか覚えていませんが、都留君は委員長か副かやっていたんではないでしょうか。経統研のメンバーの安藤次郎君は共産党員か擬似党員だったと思いますが、それでもしゃあしゃあと活動していました。組合役員としてか、党関係のことかでパージされたんですね。しかし、私は全く知らなかった。もっともこのごろはボケてますから怪しいですが。表ざたにしたり大騒ぎを起こしては安藤君のためにならないと考えて、都留君がいい意味で政治的に解決したのかもしれませんね。私も、カウンター・インテリジェンス・コール（ＣＩＣ）に「勾引」されました。「おまえは共産党員だ。占領軍の資料などを日本側へ持っていっているだろう」と、まる１日あぶらをしぼられました。大内兵衛一派に占領軍は目をつけていたというわさもありましたから、そのせいかもしれませんね。

それから、ニューディールのときのインテリで、進歩的な人々も来ていたんですね。ですから、司令部の中では私はちっとも不愉快な思いはしていなかったんです。

話があちこちになって恐縮だけれども、そんな状況でいたとき、ライスさんが来たんです。来る前に占領軍の人たちが、今度来るドクター・ライスは、ワン・オブ・サム、指折りの人間だ、すごい偉い人が来るのだというので、みんな粛然として歓迎といいますか、接待の準備をやっていたらしいです。

それで、ライスさんが来て何か会議の席でのことです。私はテーブルのわきにいたらしい。克明で律義なライスさんはアテネのときの写真を持ってきていたんですね。後でライスさんにいわせると、その会場に入ったらおま

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

えがいた。びっくりした。おまえの顔をまともに見られなかった。アテネでは同僚として会っていた。今度来てみたら、敗戦国の学者として戦勝国のところで飯をはんでいるのかと思って、顔を見られなかった。しかし、おまえはちっともそういう顔をしていない。しゃあしゃあとやっているので、オレの方がびっくりしたといってました。「いや、あなたの方が戦勝国民のコンプレックスにまいっていたのでしょう。こっちはそんなコンプレックスを持っていないんです」といってやりました。ライスさんのような偉い人に仲よくしてもらいましたので、ワン・オブ・サムから同僚扱いされまして、高橋様も，俄然上がった。いい気分でした。(笑)

それから、これは森田君にも話したんだけれども、日本側との折衝のときは、私がライスさんにくっついて歩いていたんじゃないかな。それで占領軍事務所に帰ってきてから、「アメリカに帰ると忙しいから、報告書は日本にいるうちに書く。日本側に出す前におまえに見せて、おまえがオーケーしない報告書は書かないから」ということになりました。私が一応目を通したというのはオーバーですけれども、目を通した上で彼はタイプにして、未定稿として司令部にも、日本側にも出した。その上で成案にしたんじゃないか。そんなことはだれも知らないと思っていたら、後でいわゆる左派の人々から、「高橋は日本の統計制度を植民地統計制度にした」という批判がありました。そうも見られるかもしれないなと思ったこともあります。

それから、消費者物価指数をやっているところで、いろんな項目ごとのウエートをどうするかということにな

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

った。そのころのことですから、いい資料がない。係りの人が「おまえの政治的判断に任せる」という。食糧は何%、住宅は何%、衣料は何%と、それで100%になったらいい、そういうインチキもやりました。

それから、国勢調査かな、ご婦人に対して「あなたは何遍結婚したか」という項目を入れるという。そんなべらぼうな質問をしたらこの調査全体がダメになる。日本人はそういうことをいうものじゃないと思っている。そういって占領軍とけんかした。しばらくは占領軍もそうだといっていたのに、向こうが巻き返しをした。調査票に後でゴム印が押してある。たしかその項目だったと思います。ご婦人の子供の数か結婚の数か、そんな調査票があったことがあります。アメリカではりっぱな婦人が、これが前夫です、といって現在の夫に紹介する。日本は封建的だね、といわれました。夫でも妻でも、外出のとき、「どこへ?」と聞かないのがエチケットだと教わりました。私をからかってのことかもしれません。

私は、占領軍の人々を対象にセンサスをやったんではないですが、結婚回数が複数という人が多かったです。これは、高野先生から教わったんですが、日本でも明治のころは離婚が非常に多かったのですか。それで、外国の人は、それを試験結婚(Probeheiraten)といっている、というお話でした。そういえば田舎では結婚回数はあまり気にしなかったんじゃないでしょうか。私有財産制=財産相続制ということで一時は一夫一婦制、トモ白髪までというイデオロギーが支配する。資本主義の全般的危機とともに「ありし、よき時代」に回帰するのでしょうか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

肩のこらない集まりで、夫が妻を殴るのと、妻が夫を殴るのと、統計調査の結果は？男性の答えは「もちろん、妻が夫を殴るのが多いよ」という返事でした。

こんなこともいっていいんですか。日本は統計的には低開発国扱いされていたんでしょうか。産業、職業、商品の国際的標準分類法についてもいろいろの集まりがありました。

商品分類について偉い専門家。クジラが出てきた。その人は、いとも簡単に「肥料用」に入れてしまった。こちら、びっくり。日本国民の主要たん白資源だといったら、その人、顔色なし！「申しわけありません」と平身低頭でした。占領軍の中には、「クジラも食べるよ」といっている人もいましたが。

お笑いをもう1つ。(笑)ナプキンというのが出てきました。今度は日本側の番。いとも簡単に「食卓用」に入れようとしました。ところが、大違い。旧弊なご婦人の前ではいえないんですが、「貴重品」でした。男性の出席者はシーンとしました。30年昔のことですね。

それから、マーケットバスケットのときもいろいろなことがあって、一体どういうふうにするのだという議論がありました。あとは住宅調査でも何かありました。何のときだったか覚えてませんが、こんなことがありました。ウエートとして付加価値(value added)をとるという話になった。私には「初耳」だったんです。それは、マルクス経済学のc+v+mのvとmとの計に当たる。あなた方もなかなか話せる、といって笑ったことがあります。アダム・スミスの『国富論』の冒頭から来ているんですよといっている人もいました。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　昭和21年の3月に人口動態統計の整備に関する要請というのがGHQから来ますね。そのために、従来統計局がやっていた人口動態統計を厚生省所管に移すということが出てくるわけですけれども、そこらあたりのいきさつは占領軍内部では……。

高橋　厚生省はいつできたかしら。内務省が解体されて、そして厚生省の人口調査、あれは――とお顔はよく覚えているんだけれど。小柄だが非常に活動的な人がいましたね。社会学畑の人じゃなかったかな。

大屋　人口動態統計とそれから農林統計、この2つだけが統計懇談会が行われている途中で占領軍から要請が来るんですね。それで大内委員会といわれる統計制度改善に関する委員会、それが答申されるときには、人口動態統計と農林省の作物調査、そういう面が非常に障害になっているように思いますし、それから不思議に思われるのは、ライスミッションも人口動態統計と作物統計に関してだけは余り立ち入ってないんですね。それはどういういきさつか、そこらあたりはわかりませんか。天然資源局あたりの権力が物すごく強かったというようなことはございませんか。

高橋　天然資源局のことは聞いてはいますけれども、天然資源局と私がいた経済科学局との対立とか摩擦というようなことはちっともわからなかったですね。

森　公式の文書など見ますと、厚生省に人口動態統計が移管される場合には、国際的な勧告があって――いまでもときどき国連などがこういうことをやっていますけれども、人口動態について、いままでは非常に簡単な調査をやっていたのが、死因とかその他かなり細かな調査ま

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

でやるようにということがあって、それが後ろ盾になって強引に厚生省が統計局から取っていったというようなことを書いてあるのを読んだことがあるのですけれども、そういう国際的な動きというものが、日本の戦後の統計再建の場合に、あるかかわりをしたんじゃないかなという気がしますけれども、そのあたりは……。

高橋　全然わからないですね。九大の医学部の水島さんが、私のいる2階にいたことは知ってますが。

大屋　水島さんはまだご存命でしょうか。

高橋　彼が労働力調査なんか一生懸命やっていたんじゃないかな。彼はどういう関係で占領軍に来たのか。占領軍に来ていた学者というのは、水島さん、それから昔はILOのベルンの事務局にいた人で、早稲田から来ていた人、もう亡くなりましたけれども、その人も別な部屋にいましたし、それから都留さんはすぐ安定本部へ行っちゃったから……。

大屋　先生が九大のゼミで、浅野義光さんの本をテキストに、国民経済計算みたいな演習をおやりになりましたが、あの浅野さんは占領軍と特別に関係はなかったですか。

高橋　浅野さんは、大蔵省関係の統計のことでよく来ました。それでよく知っていることになるわけですね。そういう関係で浅野、それから日本銀行の統計調査関係の人、それから各省の人が来ていて、そんなので通訳だの相手をしながらそばにいたことがありますね。

　恥をいうと、標本調査というので、デミング（W. E. Deming）が来て、ポピュレーション（population）というのが出てくるんです。母集団ということを知らないか

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ら、何だと思って……。そういうこともありました。デミングが来て、森田君も来ていたかな。森田君などから教えてもらって、それでだんだんああいうことになるんだということを覚えたことがあります。

坂元　そのときは日本に母集団という言葉はあったんでしょうか。

高橋　知らないです。九大の北川敏男さんは知っていたかもね。私の講義のとき、無給臨時講師（笑）として標本調査論だの、むずかしいところは北川さんにやってもらったりしたんです。高等学校が同じだということもあって心やすくしていただいたもんですから。数学をよくわからないで数式を振り回す人がいる。お年だからとはおっしゃらなかったですが、生兵法にならないようにと私を戒めていました。いまでも何かのときには北川さんのところに駆け込もうと思っています。このヒヤリングの皆さんもこれからあてにしますよ。（笑）

森　話が少し外れるかもしれませんけれども、高橋先生が経験された中に、たとえばＧＨＱの中でのいろんな政治的な派閥というふうなもの、つまりニューディール左派とそれ以外の対立とか、あるいはＧＨＱのある層とアメリカ本国との意見の食い違いというものが統計の面にあらわれてきたようなことはご記憶ございますか。

高橋　そういう非常に具体的なことはとてもわからなかったですけれども、私がＣＩＣから呼ばれて行くときのことです。ふだんはジープでも秘書でも自由に使えるし、社会主義宣伝のために自由勝手に歩き回っていたんです。そのＣＩＣの人が来て、「おまえをこれから拘引する、一緒に来い」というんです。すぐついていってもいいんで

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すが、「いや、上の人の許可がないと出られない」といったら、天保銭みたいなものを見せてくれた。部長のところへ行って、「こういうのが来たから行くんだ」といったら、「それはあなたの問題じゃないよ。われわれの問題だよ」つまり、私がいた経済調査局が全体としてニューディール派だったんですね。ですから、ほかのセクションから見ると、あそこはどうも「赤い」というか、左翼だと思われていて、仕事を余りやらせないというふうなことがあったかもしれません。私は顧問というのか嘱託というのか、決まった仕事がないんです。仲よしになった人々が家に呼んでくれたり、少し左翼がかった雑誌などを知らぬ顔で私の机の上に置いていったりしました。警察予備隊のことを胎児軍(embryo army)と書いているのも読みました。

森　全部がそれに該当するかどうかわかりませんけれども、たとえば戦後の統計再建のそれぞれのノこまノこまの中でつじつまの合わないこととといいますか、なかなか説明のつきにくいようなことが繰り返し出てくることがあるわけですね。それがどうもGHQ内部での、あるいはもともとは国内での対立が出てきているんじゃないかという……。

高橋　その例になるかどうかわかりませんが、統計委員会ができて、私はその委員でした。統計委員会のいわばスタートから関係しているのです。あれは1年が任期なんですが、毎年更新しているんです。ある年になったら、私の更新はダメだということになった。

それで大内先生が、「高橋を委員にしないような委員会ならやめちゃおうか」ということを私にいうんだけれど

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

も、「私1人が引っ込めば何でもない。統計制度をよくすることが大切だから」といったこともあります。そういうことを見ると、私を1人ねらい撃ちにする必要はないので、調査統計部がにらまれていたのかもしれない。

そのころ、高橋は占領軍の中にいて、占領政策を日本側がやりにくいようにしているというデマが飛んでいるという話も聞いたことがあります。私は政策に関するようなえらいことに関係していないから、「とんでもありません」といったことがあります。平野力三という農林大臣が首になるか何かの問題で議論したことがありますが。私はその後は統計委員会があると、それまでは日本側の委員として出ていたんですが、その後は占領軍代表として一番偉いところに座ることになった。日本側の委員になれないなら、わが方の代表ということで出席したらいい、というのが統計企画部の意向だったんです。1つのレジスタンス！その辺も何かあったのかもしれません。（笑）

大屋　先生は23年まで統計委員会委員ですね。23年の12月28日からの委員名簿からは名前が落ちていますね。当初は大内、近藤、有澤、中山、森田、美濃部、それから岡崎、正木、それと先生だったわけですけれども、その中で23年の12月28日以降は先生の名前だけが落ちているわけですね。

坂元　それは何かよくわからないけれども、どうしてですか。

高橋　吉田茂が、高橋はわれわれを困らせるような策謀をしてけしからぬというので、ということだったですけれどもね。しかし、吉田さんはそんなことを気にするよ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

うな小さい人ではないと思うんです。大内先生も、大きく取り上げるほどの問題でもないし、高橋だけ消せばいいと思って問題にしなかったんでしょうね。もっとも「一戦してもいいよ」と大内先生はいってはくれましたが……。だれか吉田さんの下の政治顧問みたいな人の進言だという話もありましたけれども。

坂元　高橋先生は、吉田首相とは何か……。

高橋　吉田氏とは、向こうは覚えてないでしょうが、ロンドンで、大使だった彼のところへ遊びに行って、彼からいい話を聞いているんです。おまえは若いからわからないかもしれないけれども、日本はどんなにがんばっても、アメリカやイギリスが勘弁してくれる程度にしか発展できない。それを知っていて彼らを利用することを考えるべきである。彼らに対抗して中国問題を処理しようなんて大それたことをやったら、日本は没落する。陸海軍の連中が上海事変などを起こしてやっているけれども、この調子でいけば日本はダメになりますねといってました。ちゃんと見通して話をしてました。日本を第一人称、中国を第二人称で呼び、そして、英米その他を第三人称扱いして第三国と呼ぶのがそのころはやったのですが、英米と協同で中国問題を処理すべきだというのです。

戦後になって、有澤氏が、安本（経済安定本部）長官に擬せられたときに、有澤氏が、「高橋が出るなら出てもいい」といった。それで、吉田さんにも会って、「一体あなたはわれわれをどう使うつもりだ」と首相官邸で議論した。そのときはまだ枢密院があったんですかね、枢密院での安本設置関係の議事録なんかも見せてくれました。有澤も私も日本をいきなり社会主義にするなどとは考え

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ていない。しかし、政府や与党の人々は有澤が出てきたって何もやらせないといっているじゃないですか、と私がいうと、吉田は「私があなた方にフリーハンドを認めるんだから、そんな心配は無用です」というんです。大内、有澤、私でしたか、有澤、私でしたか、占領軍のだれかにも会いました。占領軍も有澤を推していたもんですから。占領費をまけてくれるか、それに相当する援助をくれることを事前に書面で約束してくれるなら、出てもいい、とちゃちなことをいったりしましたが、結局有澤安本長官は実現しなかった。断りに行ったら、「学者ってめんどうくさいですな」の一言。「戦争では負けたが、外交では勝ってみせる」と豪語していた吉田にしてみれば、自分の憂国の志がわからないのか、と歯がゆかったのでしょうね。この勝負、わが方の負けですね。

それから、これは安本問題が起こる前からのことですが、東畑、脇村、有澤、私その他で、吉田さんが外務大臣のころ、いかにして賠償を少なくしようかという研究会をやったりして、吉田さんがときどき来てダベっていました。

そういうこともありますので、個人的に私が彼のごきげんを損じているということはないはずです。たかが知れた統計委員会の委員から高橋を落とすような策動をだれがしたのかわからないですね。日本政府が独断でそんなことをやるはずないですから、結局、占領軍内部の問題ですね。さきにいいましたが、私がＣＩＣにつれていかれるときに、おまえのことではない、われわれ内部のことだと部長がいっていたことから判断すると、私が共産党員であることがわかったり、あるいは何か占領軍の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

資料でも持ち出したことがわかれば、私を使っていた人々の責任問題になりますから、そういうこともあったのかもしれませんね。

昼呼ばれて、夕方まであぶらをしぼられ、家へ帰った。次の朝早くまたジープが迎えに来た。軍はどこの国も同じだから、どうなるかわからぬけれどもといって出頭したら、調べた人が握手を求めて、「おまえは完全にシロだ。きのうは失敬した」ということになりました。私が共産党だというデマがいろいろなところで飛んだりしていますし、占領軍の中のニューディール派とそうでない者とのけんかがあったのかもしれませんね。

そういえば、こんなことがありました。私の上に課長というのか係長というのか3人か4人いました。まだ朝鮮戦争にはなっていなかったんですが、マッカーシー旋風のころでしょうか。みな、いきなり本国帰還命令が出たんです。有罪決定までは無罪として扱え、というのが占領軍の日本側に教えていた方針だったと思うんですが、この人々は命令と同時に待遇停止なんですね。私の誤解ではないかといまでも思っているんですが。みんな明朗でいい人々だったですが、一夜にして青菜に塩。妻子もある人々、気の毒で見ていられなかったです。私などを使っていたことにも原因があるんじゃないか、と聞いたら、それもあるにはあるが、といってました。戦前、反戦運動をやってたんで、という人もいました。建国200年祭のとき、再会した人もありますが、国務省かどこかの官庁の労組役員になってました。

坂元　そのころ、統計をつくるということはそんなに重要な問題だったわけでしょうか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

高橋　そうですね。アメリカからいうと、さきにもいいましたが、「統計をもって日本を監視する」という考え方があった。占領はどうせ長くはない。占領後の日本が軍事大国になるかどうか、統計を見ればわかる。あるいはそれがわかるような統計情報を出してくれる統計制度が望ましいということがあったと思います。日本側についていうと、戦争中から統計情報が全くなかった。あっても信用できなかった。それで財界の人々は統計制度が整備され、信用できる情報を望んでいたんではないでしょうか。いつもながら総論賛成、各論反対のきらいはありますが。それから革新側は、社会主義とか国有国営とか計画経済を考えもし、主張もしてましたから、そうなるとどうしても統計重視ということになったのではないでしょうか。そこへ統計好きのアメリカが乗り込んできたということもあった。統計熱といいますか、統計ブームみたいなものが、本当に根づいたかどうかは別として、かなりあったといっていいと思います。各省に統計主管局が生まれたのもその流れですね。

大屋　GHQ内ではどのセクションが統計に対しては一番――やっぱり先生の経済調査局ですか。

高橋　さあ、経済科学局の中のあれでしょうね。

それから、これも全く思い出だけれども、そのころは通産省はなかったと思うんだけれども、占領軍からモーターの生産状況を報告しろといったら、1年か半年か知らぬけれども、モーターの台数を報告したのです。占領軍は、われわれを一体何だと思っているんだ、モーターの生産高を台数で報告するやつがあるか、何馬力かわからない。そういうふうにカンカンに怒って、どこの役所

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を呼びつけたか知らないけれども、おまえの国の統計というのはこれで済むのかと、そういうふうな喜劇もありましたね。何もかも原始時代だから。

大屋　それでは、午後は、日本統計研究所のこととか、統計制度改善委員会のこととか、九大での統計学講義、これはぼくなんかが聞いているわけですが、それから統計法のこと、そういうことをまたお伺いしたいと思います。

大屋　ちょうどGHQのところまで話が進んでおりますので、またところどころで思い出されるときに、GHQの話をしていただくことにしまして、日本統計研究所というのが、日本の統計制度の再建にいろいろな役割りを演じているわけですし、森田先生の本では、日本統計学会の再建にも非常に大きい役割りを演じた。日本統計研究所のことについては、森田先生の思い出の中にも、あるいはその他関係の方の談話の中にも出てくると思いますが、記録によりますと、先生はそのとき専務理事ということで、一番中心的な存在だったように書かれていますので、ひとつ裏話を含めて何でもしていただきたい。

高橋　仙台の第二高等学校の同級生に、大澤三千三と西沢基一というのがいました。学生時代から特に親交というほどではありませんでしたが、お互いに憎からず思っていた間柄だったんです。戦後、私が横浜正金銀行（いまの東京銀行）の職員でいたとき、2人がやってきて戦後は統計が一番大事な時代になる。おまえはいま浮浪人だ。3人で統計研究所をつくろうじゃないか」というんです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大澤君は、東大医学部の大昔の大澤何とかという偉い先生の息子で、戦前IBMのエージェントだったのです。そういう連絡もある。それから渋沢敬三が、ぼくたち3人の二高の先輩でもある。カネは渋沢に出させよう。ずいぶん無神経な話ですが、追放されてわび住まいだった渋沢さんのところへ3人で押しかけたんです。「じゃ、やろうじゃないか」ということで、だれを担ぐかということになった。当然といっては悪いけれども、大内兵衛先生を担ごうということでスタートしたのが、日本統計研究所であります。

大内所長、高橋専務理事でした。駿河台に事務所を持ちました。一時は40人ぐらい職員がいたと思います。ところがぼくらの方は、つまり経営者の方は、日本の統計制度、統計資料を整備したいという。ところが職員諸君は、大内たちがやるんだから、表向きはそうかもしれないが、日本資本主義のマルクス主義的研究所だと思い込んでいた。初めから意思が合わなかったんですね。

専務理事高橋は、雇い主として大いに労働規律を厳重にして仕事をやらせようとする。向こうさんは、マルクス主義者たちが集まっているくせに、こんなことばかりやっているのかという空気。自然に待遇もよくなかったのでしょうね。

ストライキになりました。御茶の水駅に「大内・高橋打倒」という大きなビラが張られた。「天下国家を論ずる先生方だが、研究所一つ運営できないのか」と、新聞などで大分ひやかされました。しかし、こっちはへこたれないで、経営権を振りかざし、どんどん片っ端から首にしたんです。そのときの勇士たち、その後みんなりっぱ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

な人物になりました。一々名を挙げるとおもしろいんですが、それは割愛しましょう。けんか過ぎての何とかで、その後はみんなと仲よしになっているんです。

そのうちに財政的ピンチということもあり、研究所の理事たちが、ほとんど全部統計委員会の委員になったということもあって、ちょうどかっこうがついたわけです。そこで研究所本来の必要は大きくこそなれ小さくはならない。渋沢さんからお金をもらっているという関係もあり、改組ということになりました。有澤さんの兄さんの滋さんが日本統計研究所の所長か理事長になってくださった。こうしてだんだん法政大学の方へ移るようになったんです。

そうやってもたもたしている間に政府の側に統計制度、統計機構、統計調査を改善しようという空気が強くなったんです。政府の方から大内、有澤氏に接触があった。占領軍から政府に対する示唆もあった。私はそのころは、すでに占領軍の経済科学局の嘱託になっていましたから、ちょうど日本統計研究所は、いわば統計制度、統計機構の整備という点では本来の役割りを果たしたことにもなるわけです。そういう面では統計委員会に収斂したといいますか、収まってしまったといえると思います。

統計委員会のことが出てきたので2つのことをいっておきたくなりました。1つは、しゃれ。たしか委員会の第1回会合のとき、ライスさんが出席した。大内委員長が、いま日本はライスを何よりも大切にしているが、もっと大切なライスがアメリカからやってきた。こんなうれしいことはない、と歓迎の辞を述べたことです。

もう1つは、「公事」が主ですが、私の「私事」として

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

は、美濃部君が3度も私の大恩人であることです。第1は、東大助手を首になりかけた私が九大助教授になったときのご恩。第2は、統計委員会事務局長を引き受けてくれたご恩。それまでのいきさつからいって、委員会が成立すれば、大内先生は委員長、私が事務局長というのはいわば既成の事実。大内先生もそう思い込んでいた。私が「イヤです」といった。めったに怒らない先生もこのときは大変な怒りよう。人を2階に上げておいてハシゴを取り去るのか。私は大煩悶。事務局長は行政府の、ともかくも長。社会主義宣伝はできない。また、すべきでない。私はそういう地位にはつかないという誓いを立てている。だから、というのが私の理由。公私ともの大恩人。それに人間的親しみもいただいている先生である。忠ならんとすれば孝ならず!?柄になく、私は弱り切っていた。先生とのダンマリは続く。そこへ、全く偶然に美濃部君があらわれたのである。きれいな秘書と車がつく。仕事は外から手伝う。心配無用。これで、美濃部事務局長出現。ホッとしたどころではなかった。(第3は、私が逃げられないでいた都知事候補になってくれたご恩)。

これで、申し上げたいことが済みました。

あれですね、よく覚えていませんけれども、それまで恐らく日本統計研究所で統計機構なんかに関する研究会——委員会という名前を使わないにしてもそういう会合——それからそれぞれの統計分野での調査、その他について話し合いをしていましたかもしれません。橋田さんと山中(四郎)さんが盛んに出入りするようになりました。私たちもいつの間にかお2人と接触をするようになって、やはり統計委員会で「上がり」ということになっ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

たんですね。

ですから、日本統計研究所については、日本の統計制度との関連ではつかの間の存在でしたけれども、ある意味ではつなぎ役、つなぎの場になったんじゃないかと思います。

大屋　前に日本銀行の中に国家資力研究所というのがあって、渋沢敬三さんがそれを改組しているという話も、これは大内先生に伺ったんです。

高橋　恐らく向こうは向こうで、いつまでも日本銀行の中に置くよりも、ちょうど外部に受け入れてくれる機関ができたということもあったのかもしれませんね。

大屋　そのころ日本統計研究所に集まったのは、マルクス経済学者ということですべ、統計学に関係のある方たちは残っていますか。

高橋　上杉君がやってる？

大屋　上杉正一郎さんですか。

高橋　彼なんかもそうですね。彼なんか、ストライキの大将じゃないかな。それから大阪商大にだれかいたでしょう。

大屋　いや大阪商大にいらっしたのが上杉正一郎先生。

高橋　そうですか。だれかほかにいたように思うんですが、その辺、老化と忘化のひどい私には無理ですね。

大屋　商工省の調査課長かなんかをパージかなんかで出されたということでしょう。

高橋　何かそういう人がね。いま顔思い出せないけれども。ぼくはこういう席でけんかしたんだけれどもね。さあ、ともかく研究所員とはかなりやり合ったと思うけれど、本当に忘れました。後味が少しも悪くないせいもありま

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すが。

大屋　いま武蔵大学にいらっしゃる内海庫一郎先生もそうじゃないですか。

高橋　そうだったの？（笑）

大屋　建国大学から引き揚げてきて。

高橋　覚えてないな。このごろ仲よしになってごく最近話し合っているんだけれども。内海さんは違うんじゃないかな。あと大阪商大へ行った人。上杉君じゃない人でだれかいたと思うんだ。そのときいて、後で学会で活躍するようになったのがさっきいった西沢基一、その系統で大阪に行ったんじゃないかと思うんだけれども。

さきに財政困難といいましたが、何か財政問題でスキャンダルがあったのです。そんなにお金があったんじゃないんですが、会計の紊乱があった。大内先生から、おまえダメじゃないかとひどくしかられたのを覚えています。それで、有澤滋さんが管財人として乗り込んできたんじゃないかな。私は信用したら何でも任せっきりにして、あとはロボットを決め込む主義です。何かあったらぼくが悪いことにするからといって。

時勢が時勢だったんでしょうけれども、本当は民間のものとしてもっときちんとしたものになり得たんでしょうがね。私にもっともっと企業家精神が盛んだったらですね。

大屋　そうやって日本統計研究所の中にできたのが統計懇談会ですね。統計懇談会ではもっぱら統計制度再建の話ばっかり……。

高橋　だと思いますね。近藤君、森田君、中山君、それから戦争中日本銀行総裁でパージになった人、何回も遊

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

びに来ていましたけれどもね、名前は……、山際正道君。脇村君なんかも来ていました。実質的には統計制度、統計機構のことが主だったかもしれませんね。恐らく内閣の山中さんがリーダーでやったんじゃないかと思います。

大屋　GHQの天然資源局からの要望だろうと思いますけれども、アメリカの農商務省のコロラド州統計事務所長で、F・K・リード、ドクター・リードというのが来日して、農林統計の改善を示唆しているんですけれども、ドクター・リードという先生ご存じですか。

高橋　リードという人がいて、何かで会ったことがあるような気がするけれども、どういう問題で、どういうくだりで会っているのか全然覚えてないです。私がいたところにもそういう名前の人がいたみたい。その辺、まるでわかりません。

大屋　いま統計研究所は法政大学にありますので、森さんはその後継者だから、何か日本統計研究所の歴史みたいなこと、もうそれこそ「30年史」か何か書かなければならぬのじゃないか。聞いておくべきことがあったら聞いておいてください。

高橋　思いついたけれども、ぼくは、日本統計研究所と、それから法政が引き受けている大原社会問題研究所、あれが頭の中でごっちゃになっているんだ。相原茂君がやっていたのどっち？

森　日本統計研究所。

高橋　ああ、そうか。じゃいいんだ。

大屋　だから、いまお話を伺っている限りではごっちゃじゃないです。

高橋　いいの？相原君は大原社会問題研究所の方の責任

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

者ではない？
森　ではないです。
高橋　ああそう、じゃいいです。
　あそこが、ぼくだけじゃないけれども、戦前にペンネームで書いたものを本名に直そうというので、ぼくと接触があったんですよ。こっちは、戦後書いたものだって忘れているんですから、昔のこと覚えているはずはないんでね。そんなことがありましたので、法政の大原の方の事務所へは2度ぐらい行っているんです。それでいまちょっと混乱を来している。
大屋　その統計研究所は現在も続いておりまして、もうどれくらい出したかな、あなたのところ。
森　6冊ずつぐらい出しました。
大屋　そうね、あれは何ていったかな。
森　1つは、「統計研究所所報」というのを、いま6冊目を準備しています。5冊まではできました。それと研究所の「参考資料」という、主に翻訳ですけれども、厚さが大体これ（5ミリ）くらいのが7冊ぐらい。
高橋　昔、相原さんの本が出ましたね、大きな本。あれもそうですね。「日本経済統計」。もう20年ぐらい前だね。
大屋　4冊か5冊かでしょう。
高橋　いや1冊物。
大屋　相原さんのやつが1冊で、それからほかの方もお書きになっていらっしゃいます。
高橋　そうですか。忘化、呆化。（笑）

大屋　それで、九大に復学されるその模様はどういうあれですか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

高橋　戦後、横浜正金銀行のようなところでも、社会主義を看板にしている者が取締役になってもおかしくないという空気が一時はあったんですね。労組が推薦しようとしたんだということもあったようですが。それで、占領軍にいたらそういう話があった。ぼくは何でも見てやろうと、中から金融機関を勉強するのもいいなと思っていた。九大を出た田中敏文君が、北海道の農林課長か係長から知事になった。その田中君が東京に来て、「占領軍と交渉するとき便利だから、おまえ副知事になれ」といったんです。これはおもしろい。引き受けてもいいと思っていたら、九大の菊池勇夫君がやってきた。「おまえはそういういたずらが好きで困る。つまらぬことをしないで九大にバックして、もとのとおり勉強しろ」といってしかられたんです。副知事もやめ、それから取締役なんてできっこないのでそれもやめて、九大に帰ったのです。菊池君と舟橋譲一君は昭和の初め外国で有澤さんと仲よしになり、その関係で私も仲よしになったんです。お2人には私は兄事していたということもあるんです。

そのとき九大の経済学部にバックしたのが、昭和3年に3.15事件の関係でやめた石浜知行と向坂逸郎とぼくと3人です。菊池勇夫君だったか波多野鼎さんかが来て、ぼくの家で4人落ち合って、向坂と石浜は老齢でもないんだけれども相当年をとっている。だからこの2人は東京に本拠を置いて九大には通う。高橋はまだ若いんだから、東京を完全に引き払って福岡に居を構えて、九大のために尽力しろということになったんです。

そのとき、そうなっていれば、向坂、高橋なんてけんかしないで済んだのに、ちょうどそのとき占領軍に行く

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ことになっていたのです。それで占領軍もおもしろそうだというので、占領軍と九大と半分ずつになったんです。私自身で2つの「依頼状」を書いたんです。占領軍からのものは「九大の講義に差し支えない限り占領軍の手伝いをしてほしい」、九大からのは「占領軍の仕事に差し支えない限り九大の講義をしてほしい」というものです。それでご本人が適当にさばいてやっていたんです。九大に復活したにもかかわらず、学校の行政のことも、本番である統計学の講座のことも、どれだけ良心的にやったかというと、いま顧みてざんきにたえません。(笑)

そこで、大屋さん、九大でぼくが日本経済をやることになったのはいつから？こいつ統計はダメだからこれをやらせろということになったんでしょう。

大屋　そうじゃなしに、先生が経済白書の研究、これは記録によると昭和33年ぐらいから「経済白書の研究」というのがあって、そして2～3年後に『国民の経済白書』、いわゆる平和経済計画会議というのができますね。

このころから、表(学期)は統計学、裏は日本経済論、そういうふうになったんじゃないでしょうか。

高橋　ああ、そう。じゃ、統計学は雅号で、実名は日本経済論だったのでもなかった。ぼくは、九大にいる間は統計学の講義はしていたの。

大屋　ええ、やっていらっしゃいます。

高橋　というと表向きかな。

大屋　いや、だからそこらあたりが、初めぼくが習ったころの統計学は、最初のときは有澤先生の『統計学要論』ですよ。

高橋　森田君のじゃなかった。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　はい、最初それを、ぼくは22年に聞いています。だからそのときは『統計学要論』ですね。その翌年から、森田先生の『概論』になるんです。
高橋　森田君の『概論』は定年まで使っていたはずだな。
大屋　はい、終わりのころは、たしか日本経済に関するデータをずっと整理されまして、そして森田先生の本の「相関」のところまでしか行かないんですよ、先生は。記述統計の相関係数のところまでやって、後は推測統計学だから、そこは専門の北川（敏男）さんとか、それから坂元（平八）さんとかいらっしゃるんで、非常勤でお見えになるからそれでやってくれ。そこから後半は日本経済に移行する。
高橋　そう、北川さんをぼくの教室へ呼んで講義してもらったの、あなたのときじゃない、知ってる？
大屋　そうですね。非常に学問的で良心的なんですね。だから、ぼくなどはそれを聞いていて、統計学というものに関心を持ったような気がしますね。
　それで私が昭和37年に九大に帰ってまいりまして、それから先生が37年に、西ドイツとかオーストリア、イタリアに行かれる。このときに先生が、「来年度は大屋君に頼む」というふうに教授会でおっしゃったら、助教授がやる場合には講座担当じゃないとやれないんだということで、初めてぼくは、助教授の中にも、平の助教授と講座担当の助教授という位があるんだなということを知ったわけです。そうはいっても、現実に講義はしなきゃならぬのだからということで、その年統計学をやったような気がします。
高橋　じゃ、ぼくは、講義やれないほど長く行ってたの

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

かしらね。
大屋　いえ、しばらくの間だけです。
高橋　そうですね。ちょうどいいから。
大屋　だけど先生は、ぼくが九大に帰ってきたころから、「統計学」の講義はぼくにやらせて、自分は「日本経済論」をやりたいというお気持ちは非常に強かったようですね。
高橋　ああ、そうですか。
坂元　私は昭和39年ぐらいに先生の講義を受けたんですが、「日本経済論」です。
大屋　多分、先生はぼくが帰ってきたころから------。
高橋　足を洗ったわけだ。
大屋　事あるごとに「日本経済論」という方向に進んでいらっしゃったような感じがしましたね。

大屋　それで、もとに返りますが、統計法の作成のことを、それはもうあちらこちらで資料としてはいっぱいあるのですが、ぼくはどうもこういう気がしてしようがないので、それのいわば証言みたいなものをいただきたいんですが、ライスさんはアメリカでいろいろ統計制度の改善、それから統計基準の設定ということをおやりになる中で、もしも自由にやれるなら、こうもしたい、ああもしたいという統計制度についての理想案みたいなのが頭の中にあったんじゃないか。それがアメリカでは十分実現できない。だけど日本では、敗戦後ですから、それをやる社会的条件があるのではないかという判断から、最初のライス・ドクトリンということを考えられたのではないだろうか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大内先生たちの統計制度改善委員会がつくった案と、それからライスさんの考え方との間には、断層というんですか、違いがあるように思えるわけです。そこらあたりを先生にお伺いしてみようかなと思っているのです。

非常に極論をいいますと、統計制度等々について余りコミットしておられなかったいわゆる教授グループと、10年以上になりましょうか、統計行政をやって実際問題としていろいろ苦労されているライスさんとの間に、極端にいえば質的な違いがあって、教授グループは頭の中で考えられた統計制度の改革案。文章の側面だけから見ると、ライスさんからすると、ご自分が考えているのと非常に近いと受け取られたんだけれども、重要なポイントは、統計制度改善案の方はしり抜けになっていたんじゃないか、というのが、統計法等々の成立過程を調べていった中で、ぼくの疑問に思うところなんですけれどもね。

高橋　それはいい意味で非常に深刻な問題提起だと思うんで、軽々に教授グループの意見はそうだったなどという資格はぼくにはないんですけれども、あえていえば、教授グループの諸君はそのころからべらぼうに忙しくなって、リアリスティックな意味で、日本の統計制度はいかにあるべきかというところまで本当に考えていたかということになると、それこそ物理的にそういう余裕はなかった。ということは、日本でいうと、さっきの山中さんたちの方針は特におかしくなければ、まあまあということになり、それからライスさんの方は、これまたぼくの推測もいいところだけれども、アメリカの状況を考えて、乱暴な言葉だけれども、地方分権と中央の統合とを、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それこそいい意味でまとめるような考え方をしていた。

それに対して、こっちが具体的なものを持っていて、同調するも反対するも、そこまではいっていなかったんじゃないか。さっき私がいった、ライスさんが「おまえが反対するようなものは出さないぞ」といって、原稿をぼくに見せてくれた場合に、ぼくの方としては積極説なんか持ってない。ライスさんのいうことには「結構だ」というしかなかった。結局、何をいってるかわからないが、まあ大体そんなところです。

大屋　そのライスさんの考え方を実行させないような形でチェックしていったのが、各省庁の発言にありますね。

高橋　そこは非常にはっきりしているんじゃないでしょうかね。統計委員会の先生方が、非常にはっきりしたあれを持っていて、抵抗すれば、占領軍を利用してやれたかもしれない。

大屋　というような感じを持ちながら、文献を調べています。

坂元　一番大きなポイントは何ですか。つまり、ライスさんが持っていて実行できなかったもので、日本の統計制度にとって一番大きなポイントは何ですか。

大屋　やっぱりバランスのとれたわが国の統計体系をつくるべきであるということじゃないでしょうか。そのためには、統計基準の単なる調整機能だけではダメであって、企画機能をも統計委員会が持つべきである。だから各省庁に対して、欠落している部分は、この部分の調査をやれ、それから、過大なところはほかの部とバランスをとれということまでやれるような、バランスがとれた統計体系の発達が、資本主義の経済にとって必要なんだ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ということがあったような気がするんです。
坂元　そうすると、やはりなわ張り争いということですか。
大屋　と思いますね。
高橋　管理統制ということと実地にやるというその辺のところが、ライスさんの方は恐らく中央で企画まではちゃんと握れということを考えていたかもしれない。その点は、彼はアメリカの予算局でしょう。ビューロー・オブ・バジェットの責任者でもあったから、そういう発想になりやすいし、そうじゃなくちゃ金の使い方も人の使い方もうまくいかないと考えていたのかもしれない。
大屋　企画機能を外すことに各省庁の出身者は集中するわけですね。だから近藤康男先生が、いわゆる統計委員会の教授グループのメンバーでありながら、発言はそうじゃないんですね。
高橋　彼はそうじゃないんですよ、初めから。
森　ちょっといいですか。統計委員会をめぐって、1つの事件があったんですね。
　つまり、委員会で決められたことが、2つの点で修正されて閣議に報告されたということがあるんです。その修正事項は何かというと、いま先生がおっしゃった、企画機能までも統計委員会が持つようにということと、それから委員会の委員の構成を主として学者グループに限るというふうに、つまり調整機能を強く持つような形で改組したいという方に変えられた。
　それに対して官庁の側から、企画機能まで持つのは一般統計事業だけであって、作報システムとか、あるいは人口動態統計のような、それぞれの官庁のなわ張りに入

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

る分は、それぞれの官庁がやるべきである、そういう異論を唱えたわけです。

それから、委員の構成についても、知識人だけに限るのではなくて、各官庁の統計実務家も入れるべきだというような異論があった。

結局やりとりがあって、その役所の案の方に偏った決定になったので、事実上、統計委員会の手足がもぎ取られた形になってしまったんじゃないかなというふうに思うんですけれども、そのあたりのやりとりの中で、先生との関係の部分というか、あるいはご経験の部分が何かありましたら……。

高橋　その点はわからない。

森　かなりすったもんだがあったような気がするんですね。

高橋　近藤君怒ったら困るけれども、恐らく近藤君は、統計委員会のメンバーではあるけれども、農林省の利益代表というと言葉が悪いが、そういう意味で、ちょうどいま大屋君や森さんがいったような分権傾向の方に行ったかもしれない。

それから、中山さんとか森田君は、そういう問題については完全にニュートラルですね。だから大内グループと幾らでも協調できたけれども、近藤君は、農林省との特殊な関係があるから、やはり何もかも統計委員会が掌握するというのは快しとしなかった。

森　近藤康男先生も今回の聞き取りの相手になっておりまして、それでちょっとその聞き取りをする人に聞いたんですが、近藤先生はこういう持論があったらしいんです。つまり、戦後の農業問題についても、農業の事情に

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ついて、いままでたとえば過少申告して、実態と統計を食い違わせていたのを、生産量もきちんと報告するけれども、それに対して農民保護の部分についても、ちゃんと統計指標として保障するというような、最も現代的な経済指標論みたいな形の接近があったんじゃないかと思います。

ですから、単に農林官僚の代弁者というのじゃなくて、ある意味で自分の思想といいますか、それと戦後の農業に対する統計の面での対応の仕方というのはあったように思うんです。彼自身としては、結果的には農林省の意向を代弁したような形になっているんですけれども、考え方としては、たとえばパリティ指数みたいな形で、農業を科学的な基盤といいますか、農業保護も含めてそういうことを実践したいと思っていたらしいんですね。

高橋　その点はそうですね。だからぼくがいったことは、つまり農民の考え方なり立場を大いに尊重しながらそういうところへ来ているんだということですね。

森　結果的にはその片方だけしか実現されなかったということで、近藤先生自身もかなり挫折感を感じられたという話も少し聞いております。

大屋　ライス・ミッションの副団長で、ペイトン・スタップ（P. Stapp）というのがいましたね。彼について、先生何かご記憶ありますか。

高橋　ずっと後で、ぼくが1958年にアメリカへ行ったときに、ライスさんがわざわざ飛行場まで出迎えてくれた。スタップさんたちとも会い、役所へ連れていってもらったりしました。日本でも、統計委員会の関係もあるし、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

占領軍にいた関係もあって、何度も接触していますけれども、特に仕事の点、あるいは統計の点でどうこうということはなかったと思いますね。どこか大きな会議でいきなり発言させられたりしましたが、占領政策についての批判といったことで統計には関係なかったと思いますし、詳しいことは何にも覚えてません。

大屋　このミッションの中で記憶に残っていらっしゃる……。

高橋　サピア（M. Sapir）。サピア氏は後で、アメリカではやっているコンサルタントを日本で始めようというので、ぼくにも、学校をやめてうちのコンサルタントに入れという。（笑）後でNHKの論説委員長になった藤瀬五郎さんがサピアさんのところへ、たしかどこかやめて入ったんじゃないかな。

ぼくも学校をやめるつもりはなかったと思うけれども、サピア事務所に入ろうというようなことがあった。サピアと一緒に、日本の企業のためのコンサルタントをやろうということはありました。

サピアさんは、日本人を奥さんにしていた関係もあって、その後も日本に来て、いまでも年賀状なんかやりとりしています。

サピア氏はそういうミッションにおられて、いろんな統計のことでも、ライスさんを助けてがんばっていたはずです。だけど統計について具体的に何をどうしたかということになると、みんなライスさんの報告書におさまっていますからね。彼がどうということは覚えてないし、何もわかっていません。

それからあとだれですか。スタップさん、サピアさん、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

----。
大屋　コンフィールド（J. Cornfield）。
高橋　だれかもう1人いない？
大屋　デミングさんとかクラウダー（E. T. Crowder）というのがいますがね。
高橋　クラウダーという人がいたな。そういう人とも一緒に歩いたりしましたけれども、何ということもない。みんな忘れました。
大屋　こういう人たちは、ほとんど前統計基準部のスタッフなんですけれども、日本の事情についてはそれなりに勉強していたわけですか。そうじゃないんですか。
高橋　みんな勉強家のようでしたから、やっていたと思うんですが、私には何も申し上げることないです。

大屋　地方統計機構をどうするかという問題で、当時地方自治でやかましくなってきた問題と絡んで、結局現在みたいな形に落ちついていく、そのあたりどうなんですか。
高橋　あれは占領初期だと思うんだけれども、国勢調査か何かで調査員を嘱託するでしょう。あれを日本の隣組に至るまで全部、中央の軍国主義的政府の手先だ、大事な国勢調査の調査員をそんな中央政府の下部機構にすぎない地方自治体に任せられるかという考え方が占領軍に強かったですね。
　かつての占領軍は、日本の国家機構全部が信用できないということをいったことがあって、その辺からストレートに推すと、いい中央政府のいいなりにならない独自の地方機関をつくれともとれるし、そうやっているうち

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

に、いい意味での地方分権的なものができればそれもいいというふうな、ほんの過渡期ですね。完成した考え方じゃなかったですね。

大屋　地方自治の問題というのは、そういうところにも関係してきていたわけですね。アメリカが日本の戦時中における中央政府から隣組まで統制下にあったということについての不安とか……。

高橋　つまり行き過ぎた考えといいますか、あるいはとことんまで中央集権的なファッショの支配が、あるいはナショナリスティックなあれが行き届いているんだというふうに考えていた。だから根本的に焼き直さなきゃいかぬということも、彼らのどこかには強くあったことは認められる。

坂元　その知恵といいますか、日本の制度、そういう隣組まで行く上意下達、そういうことをどうして知ったんですか。

高橋　日本の宣伝を向こうは過大に評価していた。天皇のもとで日本国民は全部、自己批判も反省もなしで屈服している、屈服という意識を持たないで服従、盲従していると、それこそ根拠もなしに、あるいは根拠があるかもしれませんが、先入主的に考えていたんじゃないでしょうか。

ですから、日本というのは家族制度で、天皇から下に至るまで、全部中央政府のさじ1本で動く国民だと考えていた。だから国内では大したレジスタンスもなしに終戦まで行ってしまった。そういう考え方のアメリカ人もいたんじゃないでしょうかね。

黒竜会というのは英訳すると、「ドラゴン」というんで

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

しょう。何こうの記者たちが黒竜会を探訪するのに戦々恐々としていたという笑い話がありますけれども。

大屋　橋本金五郎という陸軍大佐か何かの……。

高橋　ですから何こうの見方にも、ぼく読んでないんだけれども、「菊と刀」というような発想があったわけですね。

いま、こんなことを思い出しました。占領軍の日本観または日本政策の一面がわかると思うんです。私が占領軍で働いていたとき、国勢調査がありました。そのため全国各地で調査員が必要。それをどうするかが問題になった。それまでのように市町村に任せてはいけない。市町村は軍国主義日本国家の下部機構だ。民意を代表するものではないし、国民の方もそういう政府の調査に喜んで協力するはずもない。また「隣組」などが利用されるだろうが、これも信用できない。それで、調査員を新聞広告か何かで直接に募集し、応募者の中から適任者を見出すべきだということになった。それでテスト・ケースとしてやってみよう、ということで私が命令を受けて、たしか名古屋に行ったと思うんです。市町村の手をかりてはいけないというので直接に新聞広告をするか、NHKでも使ったんでしょうか、その日になったら応募者がワンサと押しかけてきたんです。インテリなり事務能力のある人で失業者だった人がはんらんしていたころです。

これも記憶が怪しいんですが、商工会議所といった「中立？」の場所でだったかもしれません。私が選考員だったのですが、とてもそんなことできる自信がない。それで、公平、公正に選考する能力は私にはない。幾つかの組に分かれジャンケンで「代表者」を決めてくれ。それ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それの組から出た「代表者」が集まって、またジャンケンで必要な数だけ調査員を決めてくれ、といったんです。そうやって決まった人々が本当に調査員になったかどうか、覚えていません。幾ら既存の国家や行政機構を無視するといったって、国勢調査は日本政府の統計局がやるんですから、結局は中央政府と地方行政機関がやったんではないでしょうか。もちろん、森田統計局以前のころのことですね。マルクスやレーニンが、革命のときは既存の国家機構を破壊する必要がある、その上で新たにスタートするんだといっているときもありますね。占領軍の中にマルクス・レーニン主義者がいたはずはありませんが、日本の「民主主義革命」を完全なものにするため、という立場に立てば、そして、それまでの日本をさきにいいましたように見ていたとすれば、そんなにおかしい考え方ではなかった、といえるかもしれませんね。多分に空想的、ロマンチックではありますが。

大屋　そのころ日本銀行の統計局は……？
高橋　有澤滋さんが統計局長、違う……？
大屋　そのころ調査局長ですね。日本の金融統計の総元締は日銀統計局だから、当然新しくできる統計法は、日銀の統計についても規制効力を持つべきだということで、統計法が日本の、いわば官庁統計の全部の基本法だという考え方で、最初は進んでいらっしゃったわけでしょう。
　それが何か文献によると、日本銀行は官庁じゃないじゃないか、その官庁じゃないところに統計法を適用してしまうのは官僚主義で間違いである。日銀は民間だから、日銀のつくる統計については、日銀の自由裁量に任すべ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

きであるというようなことを占領軍がいって、GHQの方の見解があって、日銀は統計法の枠外に外れたんだというようなことを、何かで読んだような気がします。

高橋　いまあなたのお話を聞いて思い出したんだけれども、日本銀行の調査関係の人が再三来ていた。ぼくもそういう席にいた。どういう調査関係かというと、金融ではなくて物価指数関係だったと思いますね。

そこで、どうやって調べるんだとか、本当に確かかとか、ウエートをどうするかといった話。それで、さっきいったようなインチキをやりながら私も参加していたんです。非常にテクニカルな、狭い意味では折衝も交渉もあったけれども、日銀というのを日本全体の統計制度の中でどこに位させるかというところまでは、ぼくの関知しているところでは、話に出てこなかったと思います。ついでですが、「マーケット・バスケット」という単語、私はそういうときに覚えたんじゃないかな。

大屋　小説なんか読みますと、戦後日銀が大蔵省に対して、自分の地位を築きたいという意向が非常に強く出てきますね。そのためにGHQ工作を、接待なんかも含めてかなりやっているわけですね。ですから、日銀が金融統計を自分の手中におさめたというのも、その関係があるんじゃないかなと、いまふと思ったんですけれども。

高橋　それと関係するかどうか……。そのころの日本銀行総裁は一萬田尚登さんです。ライスさんがぼくを連れて会いに行った。3人だけでいろいろ話し合っていたら、一萬田さんがグラフを持ってきて、占領費と日本の一般会計予算と物価の上昇を挙げて、こんなに占領費を取られたんでは、日本のインフレはこうなるしかない、経済

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

の安定などできっこないということを、実に淡々とざっくばらんに述べた。帰りにライスさんがぼくに「おまえの国の偉い人が、あの日銀総裁みたいにずけずけ物をいってくれると、占領軍の占領政策ももっとましなものになるんだけれども」といっていました。

そういうところなどを見ると、あなたがいまいったことと、日銀はなかなかしっかりしているということになったということと関連なくもないですね。

そういえば、官庁の人々も、特に財界の人たちは、占領軍の人々の前では何でもハイハイといっちゃうんです。一萬田さんはそういう態度だったし、ほかにも理事の人が、ほかの会議でもいい意味で毅然としていたような気もする。

大屋　小売物価統計は指定統計の中に入っていますけれども、卸売物価の方は、日銀の方は入らない、指定統計じゃないですから。だから、それはやっぱりそうした統計法から外れているということに関係あるんじゃないかという気がしますね。それをサゼストしたのがGHQの意見だったような感じですね。

高橋　他人ごとみたいですが、統計委員会でもそういう問題は取り上げられなかったんでしょうか。

大屋　いや、統計懇談会の中で出てきます。

高橋　やっぱりね。

大屋　統計懇談会の速記録の中にあるみたいです。

高橋　そういえば、あれは従来あった統計調査を、懇談会なり統計委員会ができてから、これは指定統計にするかしないかで細かい議論が進められた。

大屋　そうですね。それで恐らくそのときに、一国の統

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

計体系の中で指定統計、それからずっと後になりますけれども、統計報告調整法と、届出統計に関する法律等の統計体系という発想は、デミングさんもライスさんも当時日本にはないとおっしゃっていますし、ライス・レポートの訳の場合も余り適訳じゃないということは、やっぱりそういう概念がなかったからだと思います。

そういう状況の中で、統計法を見てみますと、実は体系的な形になっているんですね。と申しますのは、政府がやる重要統計は指定統計と、それからそうでない官庁統計、政府がやる統計は、必ず承認を受けるようなものになっておりますね。そうじゃない地方の自治体がやるのは必ず届け出をさせるということで、一国の統計がきれいにおさまっていますから。

ただ、その中で変な議論が出てくるわけですね。人口動態は調査統計でなく、業務統計に当たるのに、それを指定統計にしたりなんかする。そういう若干のでこぼこはありますけれども、そうじゃない点はきれいな形の統計体系に関する基本法になっていると思いますので、統計体系という意識はないにもかかわらず、実際先生方の頭の中には、それが何らかの形で形づけられていたような気がしますね。

大屋　先生が「経済白書」の方に傾いていかれる契機というのは……？

高橋　経済白書に傾くというのは、経済の講義の中で？あるいは一般的に？

大屋　これは一般的にじゃないかと思いますが、そのころから先生のお書きになるものの中に、経済白書関係の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ことが非常に多くなってくるんですね。それと平和経済会議の『国民の経済白書』に関することが出てくるんですね。昭和33年ぐらい。

その前に、30年に都政調査会の創立があるんですね。この都政調査会の創立のいきさつはどんな……？

高橋　そのころの高橋正雄の社会主義は、「国有・国営経済プラス計画経済」というソ連体制そのままではないにしても、それと余り違わないような社会主義体制を考えていた。そして、それがうまくいくためには、何が何でも統計機構、統計調査がきちんとしていないとダメだというふうなことを相当長く強く考えていた。しかし、だんだんに私の考えが変わってきたんです。そこへ都政調査会の問題が出てきた。都の職員組合の委員長だの書記長が反対反対では済まなくなった。そのためには、地方自治体としての東京都のあるべき姿を真剣に考えてみなければいけないということになった。憲法に「自治の本旨」という条文があるでしょう。いわばあれで目が覚めたんですね。組合の人たちと都政調査会をつくった小森武さんたちもそう考えるようになっていた。統計に結びつけていえば、日本の統計機構を「地方自治の本旨」に従って考えればどういうことになるか、という問題につながるわけです。

実はこれは地方自治体調査会のつもりだったのです。さしあたっては東京都政調査会だけれども、行く行くは全国に伸ばしてということを考えていたんです。

九大の奥田八二君がやっている福岡県政研究会はその流れです。広島にも、北海道にもできました。私の場合、中央集権一点張りの社会主義から転向しつつあったとい

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

うこともありました。地方自治体の段階で、社会主義政策というのにストレートにつながらなくても、それに役立つ方向への統計機構、統計調査資料を整備しようというねらいもあった。いい調査やいい資料を出していれば、革新政党が伸びるためにも、伸びた後でも都合いいだろう、日本全体の民主化にも役立つだろうということも考えていたんです。

平和経済計画会議というのはいつ?

大屋　「平和経済」はそれから6年ぐらいたちますね。

高橋　昭和36年です。その全国版として「平和経済」を考えた。統計との関係をいえばそういうことになります。「経済白書」とのかかわり合いということになると、政府の白書に対して「国民の白書」で牽制していこう、対抗していこうということになって、東京都政調査会版の全国版が「平和経済」ということにもなっていくわけですね。

そのどちらの場合でも、統計の先生というのを忘れないようにしておけば、つまり絶えず統計調査、統計資料の整備というのと結びついて、高橋としては学校の講義は余りまじめでなかったが、精神は統計に忠実でございますというパスポートになると考えていた。大屋さんにしかられないで済む(笑)ということもあります。いまでもそうです。

大屋　戦後、統計学会が再建になります。そのときだれが再建したかということの中で、やはり先生のお名前が出てくるわけなんですが、そしてぼくが統計学会に入りますときは、紹介者は先生と森田先生だったんです。そ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

の後、先生日本統計学会の理事になったんですが、そのころの思い出というのはございませんか。昭和23年は有澤、大内、河田龍夫、汐見三郎、杉本栄一、それから先生、田村一郎、中山伊知郎、水谷一雄、宗藤圭三、森田優三ということになっていますね。

学会を再建しなきゃいけないということの、戦後の最初の出席者の中にも、先生のお名前は入っているんですけれども、ご記憶はありませんか。

高橋　さあ、ないね。

大屋　「出席者わずか33名で始まった」というふうに、森田先生は書いていらっしゃって、その33名のお名前も出てきているわけです。

高橋　もっとも記録なんかないでしょうからね、その会合の速記録なんて。さあ、どこで集まった……？

大屋　そのときの記録は珍しいけれどもある。それは日本統計研究所に学会が委任……。

高橋　案外、名前は出ていても出席はしていないかもしれない。(笑)

大屋　東京で開かれていますので、やっぱり参加者の顔ぶれも、東京在住の方がほとんど全部で、地方から4分の1ぐらい。その中に米沢先生のお名前が出てくるわけです。

先生は、米沢先生はいつごろからご存じだったんですか。

高橋　仙台へ行ったときに、いま九大の教養部にいる船木君が、すでに米沢君と仲よくなっていた。ですから、ずっと後のことですね。

大屋　米沢先生が河出か何かの「経済学全書」の中に、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

『統計学』というのをお書きになっていらっしゃいますね。その序文のところには「この企画は本来高橋先生が受け持ってしかるべき内容だ。だけれども、自分にそれが回ってきた」というようなことが書いてございますのでね。

あのとき、その本を先生がお書きになっていらっしゃれば、戦後の「統計学」の教科書ができていたわけです。先生お忙しいので、それを断っていらっしゃるんじゃないでしょうかね。それで米沢さんを推薦したんじゃないでしょうか。どうもそういう感じの序文なんですがね。

高橋　そういえば、米沢さんとはもっと前から知っていたような……。わからないね。

その統計学会のことをいまあなたから聞かれて、矢内原先生のところで世界経済学会か国際経済学会をつくるときなんかの最初の少数の集まりのことなんかをいま思い出してきて、統計関係のことも思い出してもよさそうだなと思いながらも、その点はわからないですね。

大屋　先生、戦前ドイツにいらしたころは、ワーゲマン（E. Wagemann）はおりましたですか。

高橋　ワーゲマンは名前はずいぶん知っていたんだけれども、ドイツにそのころいたかいないか。ヴォイチンスキーは知っていましたね。

これもさっきいったように、戦前は、帰ってきたら学校になんかいられないかもしれないというんだから。つまり社会主義のことばかり考えて歩いているものだから、どこへ行っても共産党の集まりと、社会党の集まりと、それから文部省に体裁悪いから、大学教授にもちょっとひやかしで会っておこう。これでもカッセル（G. Cassel）

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

なんかにはちゃんと会っているんですけれども。
さっきお話ししたように、本も買い集めて勉強もしようと思いながら、しかし基本的にはできなかったですね。

大屋　これは大変お聞きづらい話ですけれども、先生は第1回の統計学会創立以来の会員でいらっしゃるのに、去年学会を退会なさっていらっしゃるのは、あれはどういう意味ですか。
高橋　あれは、前の年か何かに、有澤さんやなんか退会しているでしょう。
大屋　いや、そうじゃない。
高橋　では、ほかの学会かな。ともかく有澤さんが脱退しているのを見たんですよ。それを統計学会からの脱退だと読み違えたんですね。それで、みんなも名前だけ出していて関係していないので、迷惑だというのでおやめになっているんだ、じゃ自分もそれにならおうというわけですよ。ぼくはいつても冗談に、こういうことをすると大屋さんにしかられるかなあと思いながら、有澤氏たちの……。
大屋　有澤先生は確かに名誉会員になられたんで、名前が脱けています。先生はその次の評議員会で、名誉会員になれるような推薦の手続をとっていたわけです。
高橋　じゃ、早まった。
大屋　その次にぼくがそういったら、「いや、高橋先生は今春退会されました」といわれて、ぼくは。(笑)
高橋　あなたとしちゃ、メンツがなくなったわけだ。
大屋　その前の名誉会員の推薦のときに、少し学会内部でガタガタしまして、それで先生は退会されたのかなと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いうことを思いながら……。
高橋　いや、いま覚えているのは、有澤さんかだれか、ほかにも大長老が、つまり自分は非常にほかの方で忙しくて、統計のことに何も貢献できないというんで、おやめになっているんだと思っちゃってね。それだけです。ちっともあなた聞きにくいことないです。
大屋　そうですか。(笑)
高橋　たしか有澤さんがやめられたという記事が何かに載っていた、それで触発されたんだと思うんだけれども。
坂元　いや、名誉会員ですよ、有澤先生は。
大屋　名誉会員だから、こちらの名簿から落ちたんじゃないでしょうか。
坂元　そうですよ。有澤先生も、大内先生も、それから……。
大屋　伊大地さん、寺尾さん、宗藤圭三、米沢先生、山田勇さんも。
坂元　水谷一雄、中山伊知郎、全員名誉会員で、先生だけ退会。(笑)
大屋　統計審議会と統計委員会委員のあれと同じですよ。先生だけがお1人外れていらっしゃる。(笑)
高橋　そういうことです。ですから、たしか有澤さんの名前を見て、つまり名誉会員になっているのを見てやめたんじゃなくて、何か退会したという退会の記事出る？
大屋　退会の記事は出ますけれども……。
高橋　それの中に有澤さんのがあったんで。
坂元　美濃部さんかもしれない。
高橋　美濃部君なら、見てもそう気を動かすはずはないと思うんだけれども。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　先生の方が上ですからね。
高橋　それは年からいってね。美濃部君も名誉会員にならないで脱退しているの。
大屋　だから先生、それは勘違いですね。
高橋　うん、勘違いですね。
大屋　じゃ、勘違いだったからって復会していただけますか。
高橋　つまりあきもあかりもしないのに、先輩がちゃんとそうやって消えてなくなるのに、おまえは何だということですよ。
　これはっきり覚えているんです。有澤さんもやめたんだなということを。じゃほかの学会かな、有澤さんがやめたのは。(笑)
大屋　これはやっかいですな。全くおかしなことになっておりまして。
高橋　ついでに勉強しようと思って、いろんな学会に入っているんですよ。それで時間が許せば、研究会だの学会で。アフリカ学会なんてあるんですよ。それからいろんなのがある。
　そういう意味で、ちっともけ飛ばしたんじゃなくて、やっぱりふだんからコンプレックスがあるんで、この際あるべき姿に戻ろうと思った。(笑)そうね、日本統計協会のときからのことを考えれば、やめなくてもよかったんです。
大屋　戦後の再建のときもそうですしね。当然名誉会員になっていただいてしかるべき方だということで、その手続をやっている間に、先生の退会届が出ていて、ぼく事情知りませんものですから、何せこちらへ出てきたら、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

そういうことがありましたので。
高橋　そうね。あなたとしちゃびっくりするわね。どうもすみませんでした。
大屋　また先生の例の皮肉で、早くやらなければならぬという気がして。
高橋　いまでも経済統計研究会は時間さえあればずっとまじめに出席ですよ、一応。あとあれは関係ないのか、経済統計学。
坂元　あれは研究会ですから。

森　話がまた前後してしまいますが、統計委員会のときの話にちょっと戻ってお聞きしたいんですけれども、リポートコントロールとの関係、承認統計が出てきますね。統計報告調整法というものが、アメリカのリポートコントロールを下敷きにして、統計委員会でつくられてくる。そのときに、たとえばいまでいえば経団連のような経営者団体の方から、報告が過重だから少し負担を軽くしてくれという陳情のような動きがあるわけですね。日本統計研究所で統計調査をやって、どのくらい負担を強いられているかということを把握したと思うんですけれども、そのときに統計委員会の中での議論とか、つまりリポートコントロールに関する議論とか、あるいは経営者団体の側からの陳情の様子とか、高橋先生の接触された範囲で伺いたいのですが……。
高橋　いまあなたがリポートコントロールという言葉を使われたんで、すぐぼくは経団連を思い出して、ああ何かあったなとは思ってきたんですけれども。
大屋　藤沢袈裟利という方ご存じですか。経団連の調査

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

部長。
高橋　知っています。
大屋　あの方からもそのことを通じて発言になっていると思いますけれども。
高橋　そう。リポートコントロールというので、財界との関係が問題になっているということは知っている。これはあなたの発言に誘導されていうことになりそうだけれども、そういえば、そう何もかもリポートを出させられてコントロールされるんじゃかなわぬということは、いつどうというような記憶は全然ないんですけれども、感じでは、いまの話を聞けばそうだったかなと思ったりもしますね。

いかにわれわれは日本の政府から使いもしない報告を命ぜられて困っているかというふうな苦情か資料かが、司令部か、あるいは統計委員会に出てきたことがあったなということを、いまのあなたの話で思い出している。どういう関連だか覚えてないけれども、ありましたね。

占領軍からもいろんな注文があって、日本政府からもあり、一体われわれはどうしたらいいかというようなことが、財界かどこかから、たしかありましたね。それが統計委員会にあったのか、占領軍にあったのか、例によってもうぼやけていますけれども。

そのころ冗談に「オレは二重人格で、日本国民として統計委員会の委員であり、占領軍の飯を食っているんで占領軍の要員だから、よくわからないんだ」といって歩いた。

これも冗談だけれども、人事院ができるまでは、九大から最高給をもらい、それから占領軍の職員として最高

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

給をもらっていた。人事院が調べたら、高橋は２人前もらっている。(笑) ２人前やっているんだからあたりまえじゃないかといったんだけれども、どっちかにしろといわれた。占領軍に残れといわれたんだけれども、いいかげん足元の明るいうちにと思って、九大へ行ったわけですよ。そういう悪いことをしています。

大屋　内藤勝先生の思い出というのは……？

高橋　内藤勝さんは、いつあらわれてくるの。統計委員会の事務局に入っていたの？どこから入ったのかしら。彼は京都じゃない……？

大屋　はい、京都ですね。京都の法学部出身だと思います。

高橋　彼とはわりあいいろんなことで接触があった。彼は鎌倉に住んでいた関係もあって、大内先生の家令、といっちゃ悪いけれども、大内先生の世話をやっていたんです。

大屋　後で統計基準局の総務課長ですね。

高橋　統計基準局の課長さんになった。そんなところですね。大内先生のところへ行けばよく会って勉強しました。

大屋　大内先生はそういう関係の資料というのは、丹念に整理されていらっしゃる方ですか。

高橋　先生のところへしょっちゅう遊びに行っていたくせに、東京におられたころも、鎌倉に行ってからも、先生の書類や本が並んでいるところには入ったことないね。ですから覚えてないですね。先生は資料だの本だのどうしてたかな。

大屋　高橋先生も、資料類を整理して保存されるという

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

習慣は余りないでしょう。大体読まれたやつは全部もう……。

高橋　ぼくのところは、いまの家へ引っ越して25年でしょう。片づけたことがない。

大屋　ああ、そうですか。それじゃ今度行って、片づけて差し上げますので。(笑)

高橋　だれか遊びに来て「何だ」といったら、「これは田舎の新聞記者の三面記事の担当者だな」。こわいのがあり何でもないのがあり、もう惨たんたるもの。うちの女房とはもう約束していて、死んだらすぐ大屋さんに電報して、欲しいのは持っていってください、あとは全部何もいわないでごみ屋に回すんだということにしている。

大屋　整理したやつがひょっとするとまだあるかもしれないんですよ。昭和22～23年ごろの、先生が統計委員会委員をやっていらしたころの。

高橋　さあね、あるかもしれないな。

大屋　それはきっとありますよ。

高橋　特に積極的に捨ててはいないが、わからないね。

大屋　そのころのはもうどなたもお持ちじゃないんですね。

高橋　ぼくのところにあるかな。わからないな。

坂元　かなり奥の方に入っているんじゃないですか。(笑)

高橋　住宅だって、戦争直後は芝の泉岳寺のそばにいたでしょう。それから阿佐ケ谷かな、大内先生の近所のところに行ったでしょう。それから千駄ケ谷に移ったでしょう。それから三鷹に移ったでしょう。それからいまのところでしょう。それでそのころは12坪ぐらいの家ですから、とても本なんか置けない。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それから、ろくに買わないんだけれども、資料やなんかもらうのがあるでしょう。それが、いまもうちの女房笑っているんだけれども、ぼくが新聞配達したもので、新聞配達の人が「とってください」というと、絶対断らない。で、いま7つか8つとっている。(笑) 1日にこれくらい来て、何とかしろといわれるけれども、昔を思い出して、「新聞、断れるか」といっている。

それから週刊誌だの何か来ているでしょう。毎日、新聞や雑誌が来ます。それをほったらかしておきますから、もう何とかしろといわれている。完全に所得がなくなったら、全部やめちゃうといっているんだけれども、いまだ一人前に働いているから。(笑)

さっきお話ししたように、本を書いたりしていると資料を探すことがあるんだよ。正直いうと、あなたの手紙で森田優三の本を見ておけといわれて、さあ大変だ。(笑) それできのう、おとといも一生懸命探したら、あれはあっさりあった。

坂元　かなり前の方にあった。まだ1年前ですから。

高橋　家はもうめちゃくちゃですよ。

大屋　森田先生の本の後ろの方に、ヒットラーがオーストリアを合併する「独墺合併前後」というドイツ留学日記がありますね。先生はこういうあれはなかったのですか。

高橋　あのときは、ぼくはもうこっちにいた。

大屋　あッ、もう帰っていらっしゃるんですね。

高橋　そうです。帰った後です。ウィーンへは行きましたけれども、まだ合併前のファッショがオーストリアで権力を握っているときです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　1933年ごろにヒットラーが政権をとっていますが、そのころ先生は……？

高橋　ぼくが向こうへ行ったのが1936年ですから。美濃部君ももういなくなっていたか……。

ぼくは、1936年に東京から船に乗ってマルセイユへ行くまで四十何日間、ソ連は世界で一番理想的な社会だってがんばっていたんだ。面積は世界一、生活水準は一番高いということを、マルセイユへ行くまでがんばっていたんですから。それほどソ連崇拝者だった。

パリへ行った途端に、トロツキーの本とアンドレ・ジイドの「ソ連紀行」、あの2つを読んですっかり転向。見直さなくちゃいかぬということになった。

うちの資料の中に、大屋さんだのあなた方の必要な資料があるかどうか、怪しいけれども……。

中山伊知郎さんがやっていた日本統計研究会、あそこはぼくなんか役員だね。参与かなんか。年報見ると名前が出ているんだ。

満鉄から来た人で、亡くなった事務局長、だれでしたか、その人も知っていたせいか資料を送ってもらって、それは捨てないと思うんですけれども、わからないな。

ときどき整理しようかなと思うけれども、「この仕事が済んだらやるやる」と女房にいってるくせに、1つ済まないうちにまた後が出てくるんです。(笑)

この間の「八方破れ」、あれを書いたら、物を書くような悪いことはもうしないから、完全に整理をするといったら、さっきお話ししたようにゴタゴタでしょう。「死ぬまでそうやっているんだから」というから、「そうかもしれない」といっている。少しぐらいのんびりしようと思

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ってはいますけれどもね。

本当は今月末にメキシコへ行く予定だったんです。先が短いから。そうしたら何かの都合でやめちゃった。ですからいまのところは、試験の答案でしょう。それが4年生が済んで、あと3年、2年のがあるんだから、もう今月20日ごろまでには答案済みます。あとさっきの翻訳のことと、それから「法律と経済の話」というやつで……。

大屋　この間、日銀の統計局長の有吉君に講義をしてもらいまして、ちょうど先生の話が出ていました。いまの日銀の統計局長は九大出身なんですよ。

高橋　何年ごろ出た人？

大屋　昭和25年です。もう恐らく定年前じゃないでしょうか。

坂元　先生は「日本経済論」をやっていらしたけれども、その後もやっぱり統計に関することには、必ずあらわれていらっしゃいますね。

ぼくがびっくりしたのは、東芝にいるときに、先生がコンピューターショーを見にいらしたことがあるんですね。先生をずっと案内して回ったことがあるんです。もうそのとき先生は退官されていますけれども、その後コンピューターショーを見に行こうとなさるところはやっぱり……。

大屋　知的関心はすごいの。

坂元　すごいですね。

高橋　それから東京都にいたときに、コンピューター関係の講座があるでしょう、それに出ているんですよ。東京都の職員のためのプログラムみたいな、ああいうのは

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

一応出ているんです。

それからこの間仙台で、イタリアにあるオリベッティが学院の学生に何かって、講習を2週間か何か東京でやるから希望者はという掲示があったんです。ちょうどぼくはそのとき東京にいたものですから、オリベッティの講義を、やっぱりワン・セミスター聞いていますよ。後でプログラムを書けといわれたら書けなくて、やっぱりダメだなと思った。ですから関心は持っています。これからおおよそどういうことになっていくのか……。

九大出た人で、いま第一勧銀のもういいところへ行ってる人……。

大屋　高瀬。

高橋　高瀬恭介だ。彼が、これほどコンピューターシステムが広く用いられると、いまの数ほど銀行が要るか、何万お客がいても1つのところで処理できるじゃないかという話をして、これまたさっきのスターリン体制の社会主義の方へ近づくんだといばっているんだ。

このごろ銀行ではキャッシュカードや何かあるでしょう。ああいうのもあって、そうするとマーケット・メカニズム存在の余地と、非常に合理的、能率的な計算と、どう調和させるのかなと思って、人知れず涙にむせぶこともあるんですがね。(笑)

坂元　ご心配ですね。(笑)銀行の世話のことまで。

高橋　もう1つは、あなた方ご承知だろうが、何かで見たんだけれども、国連の調査では、日本の平地を前提とすれば、人口4000万か5000万でちょうどいいんですね。ですから何とかしてそこまで減らす法はないか。そうするともう少しのんびり生活できるから。いまの生産性を

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

考えれば、国民がいまの3分の1になってもいまの生活水準は保てる、それには60ぐらいでみんな死ななくちゃならない。(笑)それで弱っている。

日本経済の講義で、なぜ物価が上がるか知っているか。昔は55で皆死んだのに、このごろでは80になっても食ってるやつがいるからっていったんですが、(笑)そういう問題やら何やら大変です。

やっぱり教育制度、それから医療保険制度、文化の制度、これはどうもどんな社会主義にしても、社会主義にはなじまない制度だと思ったり、そうかといってマーケット・メカニズムでは処理できないと思ったり、どうもあなた方、21世紀の人間の課題ですね。

坂元　先生はずいぶんあちこち外国へ行っていらっしゃるわけでしょう。どこの国が一番いい国だと思いますか。それは市民生活をしやすいというか、生きがいがあるといいますか、そういう観点に立って。

高橋　せんだってまでは ——→ スウェーデンがいいなと思っていたんですけれども、スウェーデンの学者がせんだって来てだべっていたら、脱税の方法を書くつもりになれば何冊でも書けますよということを、まじめな人がいうわけですよ。そうするとこれも困る。せんだってまではスウェーデンといっていたんですけれども、この節はどこにしようかなと思って迷っているところです。(笑)スイスかなと思ったり、あの辺ですね。

坂元　日本は何位ぐらいですか。

高橋　それで、本当は日本が一番いい。(笑)

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大屋　あとは雑談で……。どうも長時間ありがとうございました。